

---

Ein dolce ~ 真央音楽院、定期演奏会 ~

愛埜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Ein dolce ー真央音楽院、定期演奏会ー

### 【Nコード】

N2413Q

### 【作者名】

愛楚

### 【あらすじ】

毎年、学長選抜メンバーによる定期演奏会が行われている。

選ばれたメンバーは個性豊か。そんなメンバー達をコンダクターは無事に束ね、曲を仕上げる事が出来るのだろうか……。学校の威信をかけた演奏が今始まる。さあ、臆さずに。後は自分たちで紡ぎ上げた音楽を楽しむだけ。それぞれの思いの丈を、音楽にのせて。

短編集(？)みたいなものもあります。

相変わらずこの文章は、少しだけの知識と想像、そして妄想で成り立っています。あり得ない設定等は目に見て(読

んで?) やってくだせい。

0 ( Es fing von hier an (前書き)

筆者：愛楚は中学・高校の6年間、吹奏楽部部員でしたが音大生ではありません。なので、ほとんど(と云うよりほぼ)想像と妄想からの産物です。そこそこ、大目に見てやってください。よろしく願います。

学校のロビーで、2人の男が話している。

1人は色素の薄い長髪を緩く束ねている。その外見は、話しかけやすそうなお兄さん。

もう一方は派手な色のスーツを着こなしている。おそらく彼だけだろう、こんな色のシャツを違和感なく着るのは。

そんな2人の手には何やら細かい字が書かれた紙が1枚。

「今年の演奏会のメンバーが決まったねえ」

「特に今年は学長の気合いが入ってたからなあ」

毎年恒例の学生選抜メンバーによる定期演奏会のメンバーが決まったのだ。

そのメンバーは学年を問わず、学長の好みだけで構成される。

「今回は特に個性がキツイね。・・・指揮は彼か」

「やつと、って気がしないでもないが…、彼の年を考えれば妥当かな。ピアノの子もいるって事は、協奏曲もやるのか、楽しみだな」

「ああ、面白くなりそうだ」

会話を終えた2人は、それぞれ自分の部屋へと戻って行った。

天才と言われる彼と、選ばれし彼らの実力が試される  
一体、どのようなコンサートになるのだろうか

0) E s f i n g v o n h i e r a n (後書き)

この設定は以前からずっと書こうと思っていました。これから  
沢山のキャラクターを、わたくしの勝手なイメージで、登場させて  
いく予定です。

‘このキャラはこんな口調じゃないっ！’等がありましたら教え  
てやってください。 よろしく願います。

“愛しさ故に”よりもスロー投稿になると思いますが、気ままに  
読んでやって下されば幸いです。

1) Ein Auswahl mitglied

学校内にある練習室。

普段、ここでは演奏会に向けて合奏練習をする為の場所だ。しかし、今は誰も楽器を演奏していない。同じ楽器同士の者で話しているだけだ。

「相変わらず変人ばかり集められたなあ」

オレンジの髪中国青年が周りを見渡して言う。

その隣には眼鏡をかけた黒髪中国青年が。2人とも手にはヴァイオリンが。

「黒崎、君が言うんじゃないよ」

「石田に言われたくねえよ」

オレンジの髪の方は黒崎一護。黒髪のほうは石田雨竜だ。彼らは演奏会のメンバーに選ばれたのだ。なので、練習室に集められている。

彼らにとって、見知ったものはお互いしか居ないらしい。

選ばれた者には手紙が送られてくる、まるで合格発表の様に。

なので、誰が選ばれたのかは指揮者と先生たち以外は、まだ知らないのだ。

「にしてもさ、指揮者って誰だ？」

「誰だろうね。去年は誰だったのさ」

「えーっと…白哉」

「先輩だろ。いい加減にしないと」

「わかってるって」



「はあ……どうだか。」

「まあ、この中では俺だけだろ2回目は」

「いや、あそこにチェロの」

「あつ！ 市丸さん」

一護は、チェロを持った暗い銀髪に近づく。

市丸ギンだ。 年齢は黒崎の先輩になる。

「あら、黒崎はんやないの。 君も選ばれたんやね」

「お互い頑張りましょう」

「そやね。 僕らだけみたいやし、2回目は」

「そうっすね」

この定期演奏会のメンバーに2年連続で選ばれる事は余りない。  
毎年、0〜1人程度だ。

なので、今年はこれでもまだ多い方になる。

「でも、コンマスはまだ決めてないらしいで」

「え？」

周りから見て、2回目の一護がコンマスに選ばれていると思うだろう。  
う。

しかし、市丸は違うと言うのだ。

「テストするらしい」

「そうなんすか？」

「まあ、君か君の友達になるとは思っけど」

2人の声が聞こえていないのか、雨竜は譜読みをしている。

「どうして、そんなに詳しいんすか？」

「だって僕、コンダクターに聞いてしもたし」

「ええーっ！ 市丸さんは指揮者が誰か知ってるんですか!？」

「しっ！ あんまり、煩したらアカン」

いきなり一護が叫ぶので、周囲の注目が2人に集まってしまった。すると、市丸は突然立ち上がった。

「始めまして、チエロの市丸ギン云います。 よろしゅう」

いきなり自己紹介をする市丸に、皆は軽く頭を下げる。

注目した事を利用して、こんな事をやってのけるなんてこの人くらいだろう。

一護などには、とつてい出来ない芸当だ。尊敬の眼差しで、一護は市丸を見ていた。

「何よ、ギン。 白々しいじゃない」

そう言いながら市丸を睨むのは、フルートの松本乱菊。

「ギンは学校の中でもトップクラス。 アンタを知らないなんて言う奴、此処には居ないわっ」

「そうやとしてもなあ。 挨拶は礼儀やさかい、なあ〜イヅル？」

「僕に振らないで下さい。 あと、それも止めて下さいっ」

そう言いながら、市丸はイヅルと呼んだ人物の頭に手をのせる。

彼はヴィオラの吉良イヅル。

まわりからは、市丸の後輩。 または市丸のお世話係として認識されている。 哀れ。

「あ、私は松本乱菊よ。よろしくね」

「僕は吉良イヅルです」

2人は、どさくさに紛れて挨拶する。

すると、扉が開けられた。

1) Ein Auswahllitglied (後書き)

コンマス：コンサートマスター (concertmaster) の略。管弦楽団の第一ヴァイオリン奏者。楽員全体の指導的立場にあり、時には指揮者の代わりもつとめる。

コンダクター：指揮者 (conductor)。

「Yahoo! 国語辞書、大辞泉」より

## 2) I c h e r s c h e i n e

バンっ

いきなりした大きな音に、皆の注目が扉へ向かう。  
四人が乱暴に扉を開けて入ってきた。

「ここかあ〜？ 集合場所ってのは」

「弦民ばかりではないか。むさ苦しい」

「オーケストラと一緒になんて久しぶりだな…」

アンサンブル  
「四重奏の練習もあるけんのお、・・・帰る」

「ちよつと、射場さん！ 俺たちは帰りませんからアンサンブルの練習はできませんよ。 帰らないで下さいっ」

皆、様々な大きさのケースを持っている。

始めに入ってきて来て、今は必死になって射場という人物を止めているのが阿散井恋次。

その次が碎蜂、有沢竜貴。そして、帰ろうとしているのが射場鉄左衛門だ。

彼らはジャズ科サキソフォン専攻の学生だ。

「あら、ジャズ科の皆さん。 どうされたのですか？」

その四人に話しかけたのはホルンの伊勢七緒。 ずれた眼鏡を直しながら話す。

「どうもこうもない。 これで呼び出されたのだからな」

そう言いながら碎蜂は封筒を見せる。

ここに居る皆なら持っていて当然の、その封筒。彼らもまた、今回の演奏会の出演者と云う事だ。

「だから、わざわざ来たつてのに指揮者はまだかよっ！」

「阿散井、大声を出すな」

恋次が苛立ちを露わにするのを碎蜂が制する。

周囲はただ茫然とその光景を見ている。

「そんな事言つたつてですよ、俺たちは明日試験じゃないつすか」

「じゃけ、帰る」

そう言つて射場が扉に手をかけた時、勝手に扉が開いた。

「？ 自動？」

「違いますからっ」

「おめえ等……、廊下まで響いてたぞ」

開いた扉の先に立っているのは、小柄な銀色。顔はすつごく不機嫌。

その彼を、この学校で知らぬものは居ない。天才と謳われる、指揮科の日番谷冬獅郎。

知名度は市丸と同等。名乗らなくても、皆が名も顔も知っている。

「今から言う順番に座つていけ。まず弦楽器。セクションは

今はどうでもいい、とりあえずその辺りに座れ。次にホルン」

啞然とする、周りを置いて指示を出していく。

あつと云う間に全員が座つた。もちろんサキソフォンも。

「今から、コンマスを決める。今配る譜面を全員で演奏してくれ」

そう言つて、冬獅郎が配つたのは“ラプソディー・イン・ブルー”。それを見た一護は楽器を出しながら、思わず声を漏らす。

「げ。またかよ」

「君はこういう曲は好きじゃなかったっけ？」

「一回やったら、もう気が済んだ。嫌いじゃないけどな」

「遅れました」

「もう、始まっているのかい？」

そう言いながら、また新たな人物が。井上織姫と綾瀬川弓親だ。

「遅いぞ。井上、綾瀬川」

「冬獅郎くん、ゴメンね。道に迷っちゃって」

「お前なあ…、自分が通う学校だろ。綾瀬川は井上の道連れか」

弓親は首を上下に振つて肯定する。

「早速だが、弾けるか？」

「僕を誰だと思つてるんだい？ これくらい余裕だよ」

そう言つて弓親はグランドピアノに近寄る。鍵盤に指が触れる。

A . . .

冬獅郎が皆のチューニングの為、オーボエの草鹿やちるに指示を出す。

A - - -

その後、皆が楽器を奏で出す。

音程を合わせて

いざ、初tutti



## 2) I c h e r s c h e i n e (後書き)

アンサンブル：ここでは、少人数で組まれた室内楽の演奏形態。合奏、重奏の意味もある。

ジャズ：19世紀末から20世紀にかけて、米国南部で黒人の民俗音楽と白人のヨーロッパ音楽とが融合してできた音楽。オリーブトの独特のリズム感、即興演奏などが特徴。 jazz

ラプソディー・イン・ブルー (Rhapsody in Blue)：アメリカの作曲家、ジョージ・ガーシュイン作曲のシンフォニックジャズ。

チューニング：楽器を調律すること。また、合奏前に楽器の音合わせをすること。 tuning

tutti<sup>トゥッティ</sup>：ここでは、合奏の意。または、全員が同時に演奏する部分。

### 3) Fine Rhapsodie

チューニングが行われている。  
その傍で織姫は冬獅郎に声をかける。

「冬獅郎くん、わたしはどうしたらいい？」

「松本からバンジョーが弾けるって聞いたんだが・・・」

「えっ、趣味程度だよ」

「弾けるのであれば、井上も演奏に加われ」

「いいの？」

「入ってくれ」

「わかった」

織姫は嬉しそうに答える。

彼女は声楽科の学生だ。なので、頻繁にtuttiに参加する事はない。

織姫のチューニングが終わったことを確認すると、冬獅郎は手を振って音を止める。

「クラリネットのソロは...。 雛森、お前が吹いてくれ」

「えっ、私が!？」

「始めるぞ」

冬獅郎は雛森の意見も聞かずに、指揮台に立つ。ちなみに今、コンマス席に座っているのは一護。

全員が指揮者を見つめ、息をひそめる。音がなくなる。

静寂

冬獅郎は一護を見て、それからクラリネットの雛森の方を見る。この音から、クラリネットのソロから、定期演奏会へと続く永くて短い旅が始まる。

### ラプソディ・イン・ブルー

曲の最後の音の余韻さえも、消えてなくなった。

今年は学校の首席ばかりが選ばれている。

それもあつてか、演奏はなかなかの出来であつた。しかし、冬獅郎は何か気に入らない様子。

「お前ら、何を思つて演奏してんだ？・・・松本、答えろ」

「え？ 聴衆を意識していますか…」

この学校は実力主義。

年齢、学年は無関係。それぞれの科や専攻の主席が学生の頂点。

年下でも、他の科の者でも、主席に対しては敬語。

それがここの暗黙の了解。といっても、最近では昔ほど厳しくは無いが。

だから、冬獅郎は乱菊に対して敬語は使わない。

冬獅郎は指揮科の首席。対して乱菊は優秀だが、主席ではないから。

「市丸、お前はどうかんだ」

「自分のしたいように弾いてるけど」

首席同士は気楽に話しあう。

市丸はチェロの首席。冬獅郎とは結構、仲が良いらしい。

「他の皆も、余計な事は考えずに思い思いに演奏してほしい」  
「なら」

碎蜂が言いながらアルトサクソフォンをケースにしまいだす。  
そして、そのケースよりも少し小さいケースを開ける。

「調和さえ乱さなければ、何をしても良いのだな。・・・今回はこれ一本でいく」

中から出て来たのはシルバーのソプラノサクソフォン。彼女の相棒だ。

どことなく、楽器も嬉しそう。

「ああ、そうしてくれ。・・・射場はさっき吹いていたのか？」  
「テナーの譜面をいじってたけん、つまらん」

射場はバリトンサクソフォン奏者だ。譜面がないから、横にいるテナーサクソフォンの阿散井の譜面を見ていたらしい。

「なら、俺がソプラノとバリトンの譜面を用意する。今回のアンコールはこれでいきたいと思っている」

「・・・コンマス決めが先とちゃうか？」  
「あ・・・」

どうやら市丸に指摘されるまで、すっかり忘れていたようだ。  
冬獅郎はヴァイオリンの方を見てから、全体を見る。  
まだコンマスのいない楽団。こんな事は異例中の異例だ。

「・・・お前らはどう思う」

「黒崎には実績があるからね。彼で行くのが無難だと思うよ」  
「俺は石田で問題ないと思うぜ。俺よりも多くの楽団を見て来たと思うし」

2人は互いを推薦し合う。そんな2人は、自他共に実力を認め合う存在。

一護はコンマスとしての実績がある。雨竜にはソリストとしての実力がある。

「すぐに譜面を用意する。もう一度演奏してくれ。」

冬獅郎は再び皆を見渡す。

「今度は石田がコンマス席に座れ」

3) **E i n e R h a p s o d i e** (後書き)

ソロ：1人で演奏や演技をすること。 **s o l o**

ソリスト：ソロをする人。独奏者。 **s o l i s t e**

余韻：音の鳴り終わったのちに、残る響き

4) Ich f?hre sie ein

冬獅郎はスコアを持って、急いで部屋を出て行った。そのことによつて皆は緊張が解けたのか、騒ぎだして煩い。早速、一護と雨竜は席を入れ替わっている。

「俺は石田が良いと思つてんだぜ、本当に」

「君の口からそんな言葉が聞けるとは思つていなかったよ」

「これでも褒めてんだよ」

「君に褒められても」

「…なんだよ」

誰が見ても、仲が悪くは見えない2人。そして、似た者同士である2人。

互いに切磋琢磨しあえる関係、それは正しくライバル。

「いつからソプラノだったんすか？」

「元々はソプラノ奏者だ。」

ヴァイオリンと逆側で碎蜂と話しているのは、チューバの大前田希千代だ。わざわざ、大前田が碎蜂の所にまで行って話しかけている。

この2人は家族間での長い付き合いがあるらしい。

「理由があつて、アルトも吹いている。」

「・・・っそっそ、そうっすか」

顔をしかめて嫌そうに言う碎蜂を見た大前田の顔が、しまったと云う表情になる。

「ああ…！ 何故あのお方は・・・っ！」

碎蜂が頭を抱えて呻きだした。その目には薄っすらと涙が。

「ちよつと、大前田。 いい加減にしなさいよ」

「んな事言つたつて」

「言い訳するんじゃないわよ。 結構な付き合いになるんでしょ」  
「でも・・・」

碎蜂をあんな状態にした大前田に、乱菊が噛みつく。

「私は、あのお方の事を・・・っ！！」

「…先輩、どうぞ」

「すまない」

ちなみに、たつきはアルトサクソフォン奏者だ。

たじたじになっている大前田を押しつけて、たつきは碎蜂にタオルを渡す。

一方で、そんな賑やかになっているサクソフォンエリアに目もくれている者もいる。

基本はセクシヨンごとに固まっているので気の合う者同士が多いのだろうか。

弦楽器セクシヨンでは、コントラバスの小椿仙太郎と荒巻真木造は違う意味で煩い。 2人を見ているだけで暑苦しい気がするのはい体どうしてだ。

互いに髪型について話している。

木管楽器セクシヨンはと云うと、皆が思い思いに楽器の手入れに勤しんでいる。



さつき乱菊の両隣に座っていたのは、煩い周囲には一切興味がないのか、一言も発していないピッコロの小島水色。  
オーボエの草鹿やちると、その横に居て一緒に煩く騒いでいるイングリッシュホルンとオーボエの両刀使いの久南白が座る。

「わーい　楽器がいくつぱい」

「お腹すいた〜。　帰りたいー！」

「あたしもお腹すいたー」

やちると白は気が合うのか、合わないのか。

さつきから2人、こんな感じである。

そして、その横にはファゴットの茶渡秦虎。　こちら水色と同じく黙っているが、周囲を見渡している。

少し離れた所には不機嫌そうな顔のソプラノクラリネットの猿柿ひより。　さつきから雛森をずっと睨んで睨んでいる。

ひよりに、穴があくほど睨まれて気まずそうな雛森桃の隣りには、バスクラリネットの浅野みづ穂が座っている。

ここの3人は他と違い、互いに目を合わそうとしていない。　そして、お互いの自己紹介さえもしていない。

これだけでも、結構な個性派ぞろいだ。　しかし、他セクションも負けてはいない。

木管楽器セクションの後方に陣を構えているのは金管楽器セクションだ。

4) Ichfrage sie ein (後書き)

スコア：合奏曲・合唱曲などの、すべての声部を記した楽譜。  
譜 score 総

## 5) Unseren Freund

金管楽器セクションは木管楽器セクションの後方に座っている。

楽器の王子、コルネットの涅ネムと本匠千鶴、そしてトランペットの虎徹勇音が列の中央に並んで座っている。

この3人は仲が良いのか悪いのか、千鶴が一方的に2人に話しかけている。他の2人の顔が引きつっているのにも気づかずに。

その横で、ホルンの伊勢七緒がトロンボーンの檜佐木修兵の方へ行き、慌てふためく大前田を見て何やら話している。

「いい加減、慣れないのでしょうかね」

「あれはもう直らねーだろ。何年の付き合いだと思ってるんだ」

「・・・」

「・・・」

ほんの少しの同情を詰め込んだ、あれはきつと悪口だ。涼しい顔して、あんな事をさらりと2人は言っている。

他にもホルンやトロンボーンのマニャーはいるのだが、どうやら気の合う者同士が固まり過ぎて、周囲にグループが出来あがってしまっているようだ。

会話に入りたくても入れない。

そんな空気が此処にはある。

金管楽器セクションの更に後方に、楽器を並べているのは打楽器セクション。ティンパニが、パーカッションの使っているスペースの大半に、鎮座している。

このパートは、皆が色々な所へと散って行ってしまっていて、この場には誰も残ってはいない。

そして、指揮台の横にはグランドピアノ。

ピアノ科の学生である弓親が椅子に座っている。その横には、さっきの演奏で、ティンパニを叩いていた斑目一角が。

「珍しいな」

「何が？」

一角が弓親に話しかける。

弓親の手は、ずっと鍵盤の上に音が鳴らない程度にそっと置かれたままだ。

「いつも一人で演奏することを好んでたじゃねえか」  
「……」

弓親は答えない。一角を見ずに、黒鍵を右手人差し指でそっと撫でる。

弓親はかなりの実力者からの伴奏依頼しか受けていない。

「他人と合わせるのは嫌いじゃなかったのかよ。 やっても伴奏程度だつたくせに、しかも自分が認めたヤツだけの」

「勿論。 いつもの通り、始めは断るつもりだったよ。」

しかも弓親はかなりの高レベルの演奏を求める。 なので、なかなか依頼も承諾していない。 弓親がピアノの前に座っているのを見ることすら、他学部の学生からしたら、無い。

弓親は言いながら、次は白鍵と黒鍵を交互になぞる。

「第一、名のない指揮者だったりしたら絶対に僕は此処にいない。でもね」

弓親はやっと一角の顔を見た。

この部屋にいる者にとって、弓親の実力は噂でしか聞いたことがない。指揮者の冬獅郎と横にいる一角を除いては。

「僕が此処にいるのは…。指揮者が、学校で最も有名な彼だったからじゃない。」

そして、騒いでいるメンバーを見る。

弓親にとっても、此処にいる者のほとんどが初対面だ。

「彼の熱意に僕が折れちゃったんだよ。あんな彼は始めてみた

…」

「それだけ・・・？」

ほんの少し楽しそうな表情で言う弓親に、一角は驚いているようだ。

「まあ、何もなしは気に食わないから条件は出したけれどね」

「何だそれ？」

「僕と共に奏するのは、僕が認めたプレイヤーでなければ、僕は演奏しない」

「？」

「まあ、曲を見ればわかるさ。まだ始まったばかりだからね、僕の初めてのオケとの共演は」

言いながら、弓親はまたピアノに向き合う。  
そして深呼吸。

「楽しみじゃないか。こんな経験、二度はない」

そう言って、弓親は鍵盤を無造作に叩いた。

5) Unseren Freund (後書き)

パーカッション：打楽器の総称。また、楽団でそれを受け持つセクション。percussion

## 6) Ein pfau

弓親がいきなり鍵盤を叩いた。何も考えずに、ただ指の先にあった白い鍵盤を。

その事によつて皆の注目が弓親へと移るが、本人は全く気にしている様子は無い。

さっきの演奏で、皆は弓親の実力を知った。だが、興味がある。

普段、人前で演奏をしない弓親の真の実力は、一体どれくらいなのか。さっきの演奏は、誰が聞いても、とてもじゃないが、真剣では無かつたように聴こえた。

皆が息をひそめる。誰も一切、音を出さない。

弓親はと云つと、姿勢を正し、何も言わずに鍵盤に指を滑らせる。細く白い指が奏でたのは、しっとりとした甘い音。

### 亡き王女のためのパヴァーヌ

ラヴェルが音楽院時代の初期に作曲したピアノ曲。優雅、かつ繊細なメロディ。

作曲家であるラヴェル自身や多くの編曲者によつて編曲されたオーケストラ譜も存在している。故にこの曲は、万民に愛されている曲の一つであると言えるよう。

約6分間。

演奏が終わり、弓親の両手が膝の上へ置かれた。

聴いているだけでは余り、この曲の難易度は高くない様に聞こえる。しかし、実際はそれなりのものだ。

それを簡単に弾き熟こなしているように聞かせる為には、それ以上の技量が必要だ。弓親にはそれだけの實力がある。

皆は完全に、弓親の演奏に聞き入っていたようだ。まだ夢心地の

よう。

パチパチパチ

1人、拍手を送る者が。

その人物は扉に背をあずけて弓親を見ている。いつの間に入ってきたのだらう。

それは冬獅郎だ。

「・・・綾瀬川、ありがとう」

「何がですか？ 僕は何もしていませんよ」

「今、曲を決めたんだよ。 今年は去年より絶対に良いものにしてやる・・・！」

「「「？」」「」」

全員、意味が分からないと云った様子だ。

互いに近くに居るものと顔を合わせるわけでもなく、ただ冬獅郎を見る。

「後で、説明する。 とりあえず、コンマスを決めてから、場所を移すぞ。 人が集まってきたら困る。」

そう言いながら、さつき仕上げて来たばかりであろう譜面を碎蜂と射場に手渡す。

毎年、この演奏会についてのいくつかの情報は本番まで公開しない。

楽員は誰で、どのくらいの規模なのか。 指揮者は誰なのか。

例年では曲目だけが公開されている。 今までの中には、全ての情報を公開した年もある。

しかし、それは指揮者の好みだ。



今年は一切を公開しないつもりらしい。曲目も、楽団の規模も、そして指揮者が誰なのかさえも。

皆が先ほど指定された席に座る。

冬獅郎が皆を見る。それに皆も応える。  
静寂

それは風のない水面の様。一切、波が立たない。

### ラプソディ・イン・ブルー

一斉に皆が、息を吸い上げる。

鳴り響く、第一音目の音。

クラリネットの遊び心溢れるグリッサンド

途中のピアノによるカデンツァ

リズムミツクな音符の数々

それを、まるで意思を持っているかのような音たち

ここにいる演奏者はもちろん、楽器も楽しそうにしている様にする見えてくる。

しかし、これだけでは他の楽団の演奏との変わりはない。

何か変革を。

指揮をしている彼は変革を行うだけの素質が、そして演奏者たちにはそれに応えるだけの技量が、十分に備わっている。

そんな事を想わせるような演奏だった。

冬獅郎がタクトを下ろす。そして皆を見る。

ゆっくりと口を開いた。

「本日は解散。後日連絡を入れる」

6) E i n p f a u (後書き)

亡き王女のためのパヴァーヌ (Pavane pour une  
infante d'Espagne) : ラヴェル作曲のピアノ曲。

後にラヴェル自身が編曲した管弦楽曲も存在する。逝ける王女のた  
めのパヴァーヌ、とも。

パヴァーヌ : 16世紀のヨーロッパで普及した行列舞踏。 pav  
ane

カデンツァ : ここでは、独奏楽器がオーケストラの伴奏を伴わず  
に自由に即興的な演奏をする部分の事、の意。楽曲の休止・終結を  
形作る旋律や和声の定型という意味も。 cadenza

タクト : 指揮棒。 tact

7) A b r e i s e

冬獅郎がゆっくりと言った言葉は、皆の予想していなかったものだった。

その様子を見て、冬獅郎は不思議そうな表情になる。意味がわからない様だ。

「どうした？ 今日解散だと言っているんだ」

「じゃなくてさ、冬獅郎」

「…日番谷先輩だ。何だ、黒崎」

冬獅郎は一護を睨む。

黒崎はと云うと、そんな事は気にしていない様だ。

「コンマスはどうするんだよ」

「次までに決めておく。さっさと帰れ」

「おいっ、それって」

一護はここまで言ったが、冬獅郎に睨まれて黙ってしまった。そして、冬獅郎は皆に背を向ける。

バンっ

派手な音を立てて部屋を出て行ってしまった。突然の事に、部屋が鎮まる。

「どういう事だよ」

「前代未聞だけど・・・」

コンマス争いをしている一護と雨竜が口を開く。  
その声音は、片方は疑問に満ち、もう一方は楽しげだ。

「前代未聞な事を軽くやってしまう。そんな彼と演奏する機会をもらって、僕は嬉しく思うよ」

「石田……」

「ただ、君が居たのは予想外だったけどね」

「……ってそれ、どういう意味だよ」

今まで静かだった部屋がざわつきだした。皆、携帯電話を広げている。

ピルルルル…ピルルルル…

一番に鳴ったのは、市丸の携帯。続いて吉良の携帯もなる。

メールの内容を呼んだ瞬間、市丸の口元がすりあがる。何やら楽しそうだ。

一方、吉良はと云うと、少し複雑そうにみえるのは気のせいか。

「イヅル。今年は僕と一緒にやね」

「…はい。よろしく願います。」

2人に来たメールは、今回の実技テストの内容。

何でも有りなこの学校では、実技テストは学校側によってランダムに決められた複数人で演奏をする。

よって、テストされる曲目は全学年、全員同じ。違つのは編曲だけ。編曲方法は、編成楽器によって変えられている。

こういう情報は、学校が用意した個人のメールアドレスに送られてくる。それを各自、自分の携帯に転送しているのだ。

皆の元に次々と、試験のメンバーが送られてくる。

「このメンバーでどうしろってんだよ…」

「あ・・・」

「つたく、この学校は本当に何も考えてねえな。だが、今回はまだマシか。」

携帯を見て、呟いたのはスネアドラムの荻堂春信。その横で茫然としているのは、シンバルの山田花太郎。そして、少し怒り気味なのは斑目一角。

「よろしくお願いしますっ」「」

そう言つて、三人に頭を下げるのはパーカッションの女の子。マリンバの虎徹清音とシロフォンの朽木ルキアだ。その眼には希望で満ちている。

「今回の花型は、まともですね」

「こちらこそよろしくお願いします」

「前は苦肉の策を取らざるを得なかったからな…」

男三人は言いながらも、懐かしむように遠くを見る。

「僕がアンティークシンバルを演奏しましたね」

「名前が一緒だから良いだろって云うだけの理由で」

花太郎が荻堂を見て言う。

荻堂も懐かしんでいるようだ。この三人は前回の試験でも組まされてきた。

三人の専攻楽器上、主旋律を演奏する楽器がなく、まさに苦肉の策

で乗り切ったのだ。

一角は誰の目にも不機嫌そうに言う。

「学校はどうやって決めてんだ…。 まあ、今回はよろしく頼む」

「はいっ、全力で取り組みます」

「頑張ります」

この部屋内に居る者同士で着々と組まれていく。 それはまるで、  
仕組まれているかのように。

「またお前達とか」

「それを見越して、練習を始めていたんすから」

「いいじゃないですか」

「これもまた、必然じゃけ」

こちらはサキソフォン。 あの4人で組まされたようだ。

本人たちは驚いていない様子。 こうなる事を見越していたようだ。

学校側は、適当に決めていると公言している。 しかし、毎回同じメンバで組まれる事が多い為、学生からは疑われている。

そして今のように、同じ空間にいる者同士で組まれていっていると  
なると尚更、疑われても仕方がない。

「やっと来た…っつて、おい」

「…どういう事だろうね」

ヴァイオリン2人の眉が引きつっている。

「このメンバーに君が選ばれていた事も予想外だったけど、此処  
まで来るともう…」

「仕方がねーな。 これも何かの縁だろうしさ、試験頑張ろうぜ」

「そうだね。よろしく」  
「おっっ」

兩竜と一護はガツチリと握手した。

ガツチリと組まれた手が解かれた。

一護は椅子から立ち上がる。そして、楽器のケースを引き寄せる。

「そうと決まったら、早く練習しようぜ。試験はいつだ？」

「そんな事も知らないのかい。約二週間後だよ」

「げっ」

「しかも、曲目はまだ発表されてないから」

「おい…」

「はあ、いい加減慣れなよ」

呆れた目で、雨竜は一護を見る。

「でも、練習に行こうか。他のメンバーと顔合わせもしておいたほうが良いから」

「そうだな。それに、もう解散って冬獅郎に言われちゃったしな。」

一護は冬獅郎に思いつきり睨まれて言われた事を思い出して言った。

「次のコレの練習はいつになるんだろうな…」

「彼がコンマスを決め次第って所じゃないかな。」

「冬獅郎がひとりて抱え込まなきゃ良いけど…。指揮科ってこ

の定期試験って何すんだ？」

「指揮科は他の学校のオーケストラや吹奏楽団の指揮で評価するみたいだよ。その他の楽器を演奏しない科や学部は、筆記のみ。」

「音楽はどうなんだ？」



「井上さんに聴きなよ」

そう言っつて、雨竜は織姫の方を一瞥する。

「そうだな、井上！」

「つつつ！！！！ え、何？ 黒崎くん」

「あのさあ……」

雨竜は一護と織姫が話をしている間に楽器を片付け、部屋を出て行っつしまつた。

「へえ……、一人ずつ歌うのか。 凄いな！」

「あ、ありがとう、黒崎君。」

「あ！ 石田のヤロー、俺を置いて行きやつた。 井上、サンキュー」

織姫の言葉を聴かずに、一護は部屋を出て行っつしまつた。

「我々も行くぞ。 基礎が大事だからな」

「そうっつスよね」

サキソフォンの4人も出て行く。 だんだん人が減り、部屋が広くなつてきた。 しかし、一向に動く気配のない者もいる。

科によつて、送られてくるタイミングにズレが生じているようだ。

パタン

携帯を閉じる音が響く。

ピアノ椅子に座つていた弓親が金管セクションの方へツカツカと歩いてきた。 そして、目的の人物の前で立ち止まる。

「今回は君か・・・」

「ああ、てめえと組むのは俺みたいだな」

この言葉で、一瞬にして部屋の中が険悪な空気で染まってしまった。弓親が修兵の目の前に立って、見下ろしながら言う。

「せいぜい、僕に見放されない様に頑張るんだね」

「・・・」

そう言っつて、弓親は部屋を出て行ってしまった。

過去、弓親は何度も試験をボイコットしている。理由は、組んだ相手が気に入らないから。理由は、組ん

今までは、たまたま、三人以上だったので弓親が抜けても試験は行われていた。

しかし、今回は違う様。

2人だけ。

どちらかの一方が抜けて曲にならない場合、試験は受けられない。修兵は急いで楽器をしまつて部屋を出て行った。

「・・・面白い事になりそうやなあ。　ほなイズル。　今さっき、

曲も発表されたし行こか」

「はい」

イズルは市丸の後に続いて出て行った。

これは偶然か、必然か

今回の試験の曲目は、“亡き王女のためのパヴァーヌ”

9) Ich bin gespannt

発表されたお題は、亡き王女の為の Pavane。

オーケストラ譜が全学生に配布され、組まれた者同士で編曲して試験に臨む。

編曲も試験の一つだ。大きな配点ではないが、あまりにもグチャグチャであれば、試験は受からない。

「偶然か、それとも…」

修兵は部屋を飛び出して、呟きながら弓親を探す。

やる気は一樣あるようなので、はじめの一步は共に踏み出せそうだが問題は、その先。

愛想を尽かされたらお終い。半ば強制的に追試験を受けなければならぬはめになる。これも、ある意味、修兵にかされた試験だ。

G . . . A G

どこからか、近くからピアノの音が聞こえる。その旋律は、先ほど知らされた試験曲の主旋律。

先ほどと似た演奏表現。おそらく弓親だ。

修兵は部屋を探し出し、中を覗く。居た。

気付かれないよう、邪魔にならない様に部屋の中に入る。

「…思ったより、早かったね」

「てめえの音が聞こえたからな。 . . . ?」

ピアノの譜面の置きに、白紙の五線譜が置かれている。弓親の右手には鉛筆が握られており、先ほどから旋律を奏でているのは左手だ。

「君、編曲は得意かい？」

「…いや、好きじゃない」

「じゃあ、僕が用意したから。これ、練習しておいてよね」

そう言っつて、弓親は一枚の譜面を修兵に手渡す。

へ音記号で書かれたそれは、試験用に編曲されたトロンボーンの譜面。

「は？ これ」

「今書いたから。間違っていたら直しておいて。君はこの曲

好き？」

向けていた顔を修兵からピアノへと戻し、弓親は何かを演奏し始めた。

それは、試験曲の伴奏。

「ああ、好きでよく吹いてるが…。俺が主旋律か」

「当たり前でしょ。僕が弾いても良いけど、それじゃあ試験には受からない」

修兵は楽器を取りだそうとしたが、止めた。

「これはいつもか」

「何が？ ……、違うよ」

弓親は、始めは何の事を言われているのかが分かっていなかったよ

うだが、すぐに分かったようだ。  
部屋の扉には、聴衆で溢れていた。

「普段、僕は学校で練習したりしないから、これは始めてだよ。  
珍しいんじゃないの」

「…、集中できねえ」

「君ってさ」

弓親は演奏を続けながら話す。　少し、演奏がぶれたのは気のせい  
か。

「緊張したら、酷い有様になるって聞いたことがあるんだけど本  
当かい？」

「緊張したら、つてのは違う。　目立ちたくねえんだよ。　だか  
ら、協奏曲は一度も演奏した事がなければ、演奏する気にもなれな  
い。」

弓親は、信じられないと云った表情で修兵を見る。

「さつきは、どうだったのさ。　力を出し切っている様子ではな  
かったけれど」

「本調子の半分くらい」

「…、変だね、君って。　目立たない為には手段を選ばない、  
か…。」

しかし、すぐに楽しそうな表情になった。

「でも、今回は目立たないとね」

「はあ？　それって…」

くつくつと笑って、弓親は修兵の目を見る。手はピアノから離された。

「嫌でも目立たないと。プロを目指すのならば尚更、下を見ずに上を見なくちゃ。ソリストを指さないとね」

音が止んだせいか。聴衆は減っていく。

「才能がある者は目立っても仕方がない。そういう運命。」

「てめえはどうなんだよ」

「僕かい？ 僕は目立ちたいからピアノなんだよ。」

そう言っつて、弓親は窓の外を見て目を細める。橙の夕日が眩しく、美しい。

「でも、ピアノは一人で演奏出来ちゃうからね……。」

「？ なにか言っただか？」

「何でもないよ。さあ、練習してきてね。明日、楽しみにしているから」

「おい」

背を向けて、部屋を出て行くこととしていた弓親が修兵を見る。

「僕もね、この曲好きなんだ。だから、よく弾いているんだ。」

「……どうしてだと思っ？」

それだけ言っつと弓親は何も持たずに部屋を出て行き、ここに修兵は一人取り残された。

「ったく、何が言いたんだよ……。」

修兵は渋々、楽器を取り出し、渡された譜面を奏で始めた。  
しかし、これではいつも修兵が奏でているのと同じ演奏。面白  
くない。

修兵は弓親が置いて行った鉛筆を手に取り、譜面を書き換え始めた。  
もちろん、ピアノ譜も。



10) E i n A n f a n g

あれから二日が経った。その間、一切連絡はなかった。

朝、選抜メンバーに一斉送信されたメールが届く。送信者は日番谷冬獅郎。

その内容は・・・

久しぶりだな。あれから2日経った。

試験の曲目も発表され、これから忙しくなると思う。だが、それはそれだ。

今日の昼から、A510で練習を行う。

次の曲を見ておいてほしい。

? 亡き王女のためのパヴァーヌ

? ラプソディ・イン・ブルー

? はサキソフォン、ピアノ、声楽は無し。

残りの曲についてや曲順などについては、昼に詳しく話す。

あと、セクシオンリーダーは俺が決めた。

残りのメンバーのセクションについては、リーダーを中心に決めておいてくれ。

コンマス：石田

2ndヴァイオリン：黒崎

弦楽器セクシオンリーダー：黒崎、市丸

木管楽器セクシヨンリーダー；松本  
金管楽器セクシヨンリーダー；伊勢  
打楽器セクシヨンリーダー；斑目

わからない事があれば、俺は学校内にいる。探し出せ。  
以上だ。遅刻するなよ。

日番谷冬獅郎

いきなり送られてきた文面を読み、皆は一斉に動き出す。

只今の時刻、午前八時。

「それにしても、昼からって急じゃねえか」

「そうだけど。シロちゃんも何か考えがあるんじゃない？」

「とりあえず急がないと…。？　こんな朝早くからピアノの音色が？」

同期三人組は廊下を走っていた、それぞれの楽器が入れられたケースを持って。　転ばないよう慎重に、かつ早く。

「向かっている方向とほぼ同じだね」

「のぞいてみるか」

「うん、そうしよ」

だんだん近づいてくるピアノの音色。　一体誰なのか。

階段を上がり、数多く並ぶ部屋のある一室の前に誰かが立っている。

その人物に見覚えがある。

「檜佐木先輩。　どう…？」

「静かにしろ、今集中してんだよ」

そう言って、修兵は部屋の中を指さす。　そこには弓親が。

「…弓親さん？」

「ああ」

「先輩はどうして・・・？」

「俺の今回の試験のパートナー、綾瀬川なんだよ。今、中でピアノを弾いている奴。」

「じゃあ、はいっちゃんえば良いじゃないですか」

「・・・」

後輩の問いに律義に答えていた男は詰まってしまった。一体何があるか云うのか。

「仲、悪いんですか」

「・・・良くはねえ、その程度だ。」

「別に問題は無いんじゃない」

「ああ、だが」

「？」

「外で聞いてるって」

静かに扉が開けられた。それに四人は気が付いていない。

しかし、弓親は何気なく自分に背を向けている修兵に問いかける。

「で、感想は？」

「譜面通りで面白みが一切ねえ、それなら俺の方が上手く弾ける。」

「・・・。そっちの三人は誰？」

やっと弓親に存在を気づいてもらった三人は、修兵の後ろでコソコソ話す。

「今、先輩って・・・俺の聞き間違いか」

「私にも聴こえたよ。結構な爆弾発言だったよね」

「間違いなく、ピアノ科に喧嘩売ってるよ」

「やっぱり君たちもそう思う？ 僕にもそう聞こえたよ」  
「……つつつ……!!」  
「おい、何話してんだ。」

三人の輪に、気付かれることなく弓親は入っている。

「……何でもないです」「」「」  
「ははっ、君の後輩なんだ」  
「ああ。 って、てめえも一緒にそこの輪に入ってるじゃねえ。  
ちなみに、コイツ等は選抜メンバーにも選ばれてる」  
「そうだったっけ？ 覚えてないや……って、今日昼からある  
んだ」  
「え、そうなのか」

そう言って、修兵は弓親の携帯を覗く。

「先輩、知らなかったんスか」  
「ずっとこんな感じだったからな。 ……いい加減、寝ねえとマ  
ズいな」

恋次の問いかけに応えて、修兵はひとつ欠伸をする。

「そうだね、このままじゃ終わりまで持たない」  
「弓親さんまで。 一体どれだけ練習してたんスか」

その問いに、2人は顔を見合わせる。

「夜は寝てねえから……」  
「昨日の午後八時からずっと……。 今何時？」  
「午前八時です。 十二時間も練習して……?」

「そうなるね」

イズルの目が見開かれる。その横に立っている雛森も驚いている様子。

「部屋が防音対策してあるからって、夜に演奏したら外まで聞こえるじゃないっすか」

「大丈夫だよ。このあたり一帯は、ある坊ちゃんの親が所有する土地や家だから」

「「坊ちゃん?」「」」

三人は不思議そうに弓親を見る。こんな事を聴くのは初めてのようだ。

修兵はというと、その言葉を聴き、すぐ弓親の口を塞ぐ。

「おい、てめえ。練習」

「あ s g f g j n y d v d . . !」

こうして、弓親は修兵によって部屋に連れ戻された。

「今の感じからして」

2人が去ってから、イズルが口を開く。

「坊ちゃんって、先輩なの?」

「そんな話聞いたことないよ、ねえ阿散井くん」

「俺も聴いた事ねえぞ。ってか、先輩から家族についての話を聞いたことがない」

三人の中に、謎がひとつ出来たよう。

12) Sekunde

やはり昼からは、急すぎたか。

そう思いながら、窓の外を見ているのは日番谷冬獅郎。今の時刻、午前9時。

二日前に知り合ったばかりの者たちが外を、廊下を走り回っている。

「まあ…大丈夫だろう」

「何が“大丈夫”だ。冬獅郎っ！」

「日番谷先輩だっつっ!!!」

さつきまで冬獅郎だけであったはずの部屋に、いつの間にか一護が居る。

「何か用か、黒崎。コンマスなら決まったぞ」

「っ！」

「じゃあ何だ。…そんなに2ndトップなのが気に入らないのか」

「そーじゃねえけど」

「…てめえが2ndなのには、二つの理由がある」

さつきまで煩かった一護は、大人しく冬獅郎を見ている。

「一つ目は、1stと2ndの技量をそろえる為。黒崎と石田が1stに入ると、2ndが崩れる。口には出さなかったが、現に前回のtuttiがそうだった。聴いていられる音楽としてはギリギリ、限界だ。練習があんなんで、本番で良い演奏になるとは到底思えない。黒崎、これは同じように感じたんじゃないか」

「…」

一護は黙って、冬獅郎の言葉に頷く。

「二つ目の理由は・・・、なんとなくだ」

「はあ？」

これは予想していなかった答えのようだ。一護の黒目が真ん丸に見開かれている。

「要は、黒崎ならまとめ上げられるだろうと思った。それだけだ」

「じゃあ、どうしてコンマスは石田なんっすか？」

「！ 恋次、居るなら居るって言えよ」

「うるせーな。日番谷先輩は気付いてたんだよ」

一護と恋次が睨みあう。喧嘩でも起こりそうな雰囲気にも包まれる。それを冬獅郎が制した。

「用がないなら出て行け。」

「「ゴメンナサイ」」

「・・・石田がコンマスなのは…。自分で考える。邪魔をしに来たのなら、さっさと出て行け」

「「失礼しました」」

嵐の如く、暖色系の2人が去って行った。再び、部屋の中には静寂が戻って来る。

「皆、何だかんだ言って本当に大丈夫そうだな…。問題は俺自身か」



冬獅郎は小さく呟いた。 その手には鉛筆、そして机には何か書かれた五線譜。

追い出されてしまった2人は、共に学生玄関にいた。立ち止まっているのも邪魔になるだけなので、何も考えずに足を運ぶ。

「恋次は何をしに行つてたんだ？」

「たまたま通りかかったただだよ。一護、てめえの声が廊下に響いてたぜ。」

「ははは……」

恥ずかしいのか何なのか、一護は乾いた声で笑う。

「それより、練習しに行かなくても良いのか」

「そうだな……。二曲とも演奏会でやった曲だからな、大丈夫だろ。そういうお前はどうかんだ？」

「俺は一曲だけ練習しておけば問題ねえんだよ。ヴァイオリンと違って、サキソフォンだからな」

「出番が少ないのも虚しいぜ」

「演奏会の曲目が二曲はあり得ねえだろ。何か来るだろうから、心配いらねえ」

「それもそうだな」

目的もなく歩き彷徨っていた。自然と足が向かったのは、今日昼から使用する部屋。

こここの扉は他よりも大きい。なのに、他のよりも軽い。

大きな楽器を持っていても、片手で開閉が出来るようにされている。

シャーン

中から楽器の音が。

どこかの楽団が練習をしているはずがない。なぜなら、ここは演奏会まで選抜メンバーの完全貸し切りにされるからだ。

「入るか」

そう言つて、恋次は扉を開けた。すると、中には複数の人影が。パークッションの皆さんだ。

今の音はシンバルだ。花太郎が楽器を持って、2人を見ている。

「どうした、恋次。」

「一角さん・・・、何してんスか」

楽器が適当に配置されている。その奥で、複数の人間が輪になつて床に座り込んでいた。

「今、試験に向けて作戦会議中だ」

「そうだぞ、恋次。出て行け。ついでに一護もだ」

「ついでつて酷くないか、ルキア」

一角の横に座っていたのはルキア。

その手には、鉛筆とマレットがしっかりと握られている。

「げ。そう云えば、呼び出されてたの忘れてた・・・。じゃあな！」

そう言つて、顔を蒼白にして恋次は去つて行つた。

「まったく、何だつて云うんだ…？」

そう呟くと、パークションの皆に視線で追い出される様な形で、  
一護も部屋を後にした。

13) Ich bin am schnellsten

昼。 明確な時間を告げられていなかったメンバーは、12時には部屋に集まっていた。

誰かが聞きに行けばよかったのだが、皆焦っていたので考え付かなかったのだろう。 待ち惚けを喰らっている。

「悪い、遅くなった」

「いや、皆が揃ったのはさっきだから」

「そうか」

音もなく入ってきたのは、皆が待っていたコンダクター。 いきなりコンマスとの連携を見せる。

「さっそくだが、曲目について話しておく。 “亡き王女のため

のパヴァーヌ”は演奏会の二曲目にもってくる。 “ラプソディ・

イン・ブルー”は、少し長いがカットなしでアンコールに演奏。

ここまででは良いか？」

皆、冬獅郎の言葉に頷く。 それを見て、まだ話を続ける。

「一曲目には、“『ルスランとリュドミラ』序曲”を演奏する。

早さは世界最速を越すつもりだ。」

「おい、冬獅郎。 って事は・・・4分40秒くらいって事か？」

「・・・そうだ。」

この言葉に、ざわつく。

一般の楽団ならば、5分くらいの演奏をしている。 20秒も違え

ば、大分曲の早さに対する印象が異なってきた。

「俺はこのメンバーなら不可能ではないと思っている」

「そうだな、石田だし。」

「どついう意味だ。黒崎、君もいるだろう」

雨竜と一護が他のメンバーを挟んで話すので、間に挟まれた子は気まずそうだ。

「・・・そして、三曲目。メインに持ってくるのは、今・・・」

「何だよ、冬獅郎。もったいぶんなんて」

「うるせえ、黒崎。今、・・・その曲は俺が作曲している途中だ。もう少し待ってくれ」

「え、冬獅郎って作曲出来たのか」

「それくらい出来る。その曲は全員参加の予定だ。もう少し待ってくれ」

「どんな曲になる予定なん？」

ここで口を開いたのは、ずっと黙っていた市丸。

「全四楽章で構成する予定だ。それぞれ、色々な楽器を目立たせるつもりでいる。ちなみに、第一楽章は市丸、てめえだ。」

「そーなん。頑張らなあ」

「そんな感じで進める予定だ。曲については以上だ。何か質問はあるか。なかったら、今日はコレを演奏する。関係者だけ残ってくれればいい。他は好きにしてくれ」

そう言って、冬獅郎が配り始めたのは演奏会の一曲目に演奏する予定の『ルスランとリュドミラ』序曲”。

この曲に関係のない者は、誰ひとりとして出て行かない。この演

奏がどうなるか、気になるのだ。

「俺のテンポについて来い。途中、1人になっても良い。俺に、曲に、演奏に噛り付いてこい。」

そう言って、冬獅郎はタクトを振り上げる。一人ひとりの顔を見て、小さく頷き、最後にコンマスを見る。

『ルスランとリュドミラ』序曲

振られているテンポは、聞いていて焦るほどの速いテンポ。

三小節目にして早くも弦楽器の者が脱落していき、五小節目で再び演奏に加わる。辛うじてついて来ている者も八分音符では完全にバラけてしまっている。

早くも焦りが見え始めている弦楽器とは対照的に、管楽器はまだ余裕があるようだ。

歌メロディが始まる。

ヴァイオリンとフルートが共に奏でる。

再び、八分音符のパッセージが出てくる。ここでもやはりバラけてしまうが、演奏が止まる事は無く進んでいく……。

何だかんだで演奏が終わった。皆、言葉は無い。

内容は、悲惨、無残むざん、そして無様。他人には絶対に聞かれたくない、そんな演奏。

「演奏会までに仕上げる。目指すは、世界最速」

「げ、でけえ事言うなあ。」

「このメンバーなら出来る気がする。そんな予感がしているん

だ  
」

そう言う冬獅郎の目は輝いている。その色は希望の色。  
自信があるからこそその言動。

「一緒にやってくれるか」

「今更何を言って……。皆、一緒に演奏したいから、今ここに集まっているんだ。」

「有り難う。そして、よろしく頼む、石田。」

「ああ」

2人は手を取り合った。

13) Ich bin am schnellsten (後書き)

ルスランとリュドミラ：ロシアの代表的作曲家、ミハイル・グリンカが作曲したオペラ。序曲は単独で演奏されることが多い。



もう、すっかり日は沈んでしまった。

影を作っているのは街灯の明かり。そして、その下を歩く三人。まだ、校内にいる。現在位置、学生玄関を出てすぐ。周囲に人影は無い。

「今日の合奏は、久しぶりに指が吊るかと思ったよ」

「私も。・・・世界最速、か。今の私には夢のような事だけど、シロちゃんは本気みたいだね。」

「お疲れさん、まあ頑張れ。目標は高い方が良いだろ」

話しているのは順に、イツル、雛森、恋次の三人。ゆっくり歩きながら話している。

「全く。他人事だと思って、こっちの身にもなつてよ」

「そうだよ。私なんか指が痙攣しちゃってるんだからね」

よく見ると、雛森の指が小刻みに震えている。イツルの指の腹も、赤くなつてしまっている。

「2人とも力入れ過ぎなんじゃねえのか。もっと楽しさ。そうしねえと、楽器も可哀想だろ」

「私だつて、クラリネットに悪いことをしたとは思ってるんだよ」  
「でも、疲れてくるとつい力が入ってしまった」

「そこを上手くコントロールするのが、音大生とただの趣味でやつてる奴との違いだろ。・・・? 何か聞こえねえか」

恋次が校舎を見上げる。すると、視線の先には電気がついていて窓も開け放たれている一室が。

「これはトロンボーン・・・？ 檜佐木先輩じゃないの？」  
「相変わらず練習熱心な人だね。他の皆はほとんど帰っちゃったよ」

「あの部屋か。窓を開けて練習してるから、ここにも音が流れってくる。…そう言えば、この学校って昼間っから外で思いつきり吹いても苦情が来たことないらしい。」

「だから、夜でも窓を開けて練習できる。そんなこと知らなかった」

「知ってたら、皆は中よりも外で練習しちゃうよ。そうしたら、さすがに苦情がきちやう。」

三人は自分たちが出した結論に納得する。  
そして、雛森はほとんど無意識に音のする窓を見上げた。すると誰かがこっちに向かって手を振っている。それに応えて手を振りながら言う。

「誰だろ、昼にあった。え〜っと」

「覚えてねーのか、雛森？」

「そういう阿散井君は覚えてるのっ？」

すぐに窓の弓親が去って行ったので、雛森は手を下ろし恋次を見る。

「おう。ピアノ科の綾瀬川弓親さんだぜ。俺は一応知り合いなんだ」

「そうだったんだ。知らなかったなあ。ねえ、吉良くん」

「そうだね。向こうは、僕たちの事は知らないだろうね。昼にあった時もそう言ってたし」

「ああ、檜佐木先輩の後輩、その程度だろうと思う。でも、顔は覚えてもらえたみたいだな」

「あの人って有名なの？」

「色々な武勇伝を現在進行形でつくっていったって、って云うイメージが僕にはあるけど」

「ピアノ科を震撼させてるってのは事実みてえだけど、それ以上の事は俺も知らねえ。一緒に演奏するのも初めてだ。」

「謎が多い人なんだね」

「謎とか秘密、こだわりってのが多いってだけな気がする。」

「謎、秘密にこだわり、か」

日が暮れたせいで、冷たい風が吹く。

昼間との寒暖差が激しい。薄着の人間には肌寒い。

「寒いな。いつまでも、ここにいるても何もねえから帰るか」

「そうだね」

「・・・私だけかなあ。いつつ私たちって一緒に居るよね。」

「何だ、今更。」

「先輩に初めて会った時も、再開した時も。この前会った時も」

「どうした、雛森。先輩に話したいことがあるんだったら、行って来いよ」

「ううん。違うよ。なんとなくそう思っただけ。思い出したら懐かしくなっただけ」

「確かにそうだね。入学式、阿散井くんがいきなり叫ぶから僕たちは恥ずかしかったんだよ」

「あの時は悪かったよ。夢中になっちまってさ」

そんな話を話しながら、三人は仲良く帰路についた。

演奏会に向けて練習しなければいけないのは勿論だが、それよりも学生にとつて大事な試験が刻々と近づいていた。

第一、演奏会まではまだまだ時間がある。三月の下旬に行つただから。

今は夏も終わり、秋は10月。

試験までは後、一週間と2日。一度決まったメンバーの変更は無理。だから、今居る者でどうにかしなければならぬ。

皆に焦りの色が見え始める。

「シンバルは全編アドリブだな。良いと思う所で効果的な一発が決まればそれで十分だ。」

「はい、任せて下さい」

「そつちは決まったか？」

「斑目先輩、一度聞いてもらつてもよろしいでしょうか？」

「ああ、聞かせてくれ」

「ここは、この前、選抜メンバーで練習した部屋。ここならば、打楽器が全て揃つているので何かと手っ取り早い。」

「では、いきます」

そう言つて、鍵盤の清音とルキアの2人は顔を見合わせてから演奏を始める。

2人が演奏する譜面はピアノ譜。清音が左手譜を、ルキアが右手譜を演奏する。

そこにシンバルが加わり、スネアとティンパニも参加する。

一つの曲が出来ていく。

楽器は少ないが、音は管弦楽団のような壮大な演奏を目指して。

「この音楽院は科によって棟が別れている。

皆が使うA棟。演奏学部 of 弦楽器科はB棟、吹奏学科はC棟、鍵盤学科はD棟、ジャズ科はE棟、声楽学科はF棟。音楽創作学部の指揮科と作曲学科はG棟。音楽教育学部のH棟。音楽療法学科のI棟。

広大な敷地に、これだけの建物があると移動が大変。なので定期演奏会の選抜メンバーにでも選ばなければ、他学部の学生とは卒業までに一度も会わない可能性もある。

音楽創作学部や音楽教育学部、音楽療法学科の学生と会いにくい事は勿論、ジャズ科は十数年前に新設されたばかり。他の演奏学部の学生と一線がある。

「そこでバリトンはもつと響かせる。テナーはバリトンに寄り掛かり過ぎるな。アルトはもつと歌え。」

ここはE棟のある一室。四人の中で最も小柄な女性が話している。ジャズ科サクソフォン専攻の学生が使っている練習室。といって、ジャズ科には専攻は一つしかない。

新設された当初は、トランペットやトロンボーン、ピアノ、ベースなどのジャズに加わる楽器が寄り集まって出来た科だった。

しかし、今では演奏学部 to 吸収されてしまい、今ではサクソフォンしか残っていない。

「大分よくなったな。今回も問題はないだろう」

「そうっすね。あとは演奏会か……」

「まだ先の話だな。いつも思う。演奏会の準備が早すぎる」

「八八八・・・」

こうなつたら恋次は笑うしかない。なぜこのようなスケジュールなのかは、此処に居る皆は知らない事だから。

「この時期が来ると思いだしてしまつて辛い」

碎蜂は悲しそうな表情になる。

「...」

皆声をかけられない。こういう時はそつとしておくのが得策だ。他の三人は、碎蜂をひとり部屋に残して去つて行った。

「・・・夜一様、もう一度共に演奏したかった」

あれからもう一年が経つのか。

「あー！」

声が廊下まで聞こえてくる。部屋の扉は閉められているにも関わらず、だ。

周りの教室に対して配慮なく、一護は叫んだ。

「もう、どうすればいいんだよ！」

「君がもう少し練習してさえいれば問題は無かったんだけどね」

「うるせーな、時間がなかったんだよ。ってか、石田は時間があるのか？」

「僕は君とほぼ同じ授業を受けているんだよ。時間はいくらでもあったじゃないか」

「……。参りました」

そう言って、一護は雨竜に頭を下げる。

それを、他のメンバーは茫然と見ていた。彼らの中で、一護に対するイメージが音を立てて崩れて行く。

「いつまで頭を下げているつもりだい。練習しないと知らないよ。」

「わかってるって。もう日が無いってことも」

そう言って、試験に向けての練習が再開される。ここはB棟のある一室。

此処に居るメンバーは一護と雨竜、そして彼らよりも年下の2人だ。

「わかっているのであれば、練習したらどうだい。黒崎一護。」

「だつてよ」

「じゃあ、黒崎は放っておいて始めようか。」

「おい、石田！ 俺に対して厳しくねえか?!」

ここは、大層賑やかに練習が進んでいった。

他の部屋は賑やかであるのに対して、静かな部屋の中に少年が1人。ピアノの前に座っている。

しかし、少年であるのは外見だけ。中身は誰よりも大人だ。

京楽は、ノックもせずに入った。

「どうしたんだい、思い詰めたような顔して。皆心配してたよ」

「…京楽、先生。」

「なんだい、君らしくないね」

「…俺…行き詰っちゃった。どうしたらいいか、わから

ねえ」

そう呟いた少年の視線の先には、丁寧に手書きされた譜面が。

その表紙に題名は書いていない。書いてあるのは、『作曲：日番

谷冬獅郎』の文字だけ。

それを見た京楽は、何も言わず手に取った。

「先生」

言っで見上げた冬獅郎の顔には、いつになく自信がなさそうな色が濃い。

「…おもしろいじゃないか」



「え？」

「音大生とは思えないほど、適当に書かれている。これじゃあ、まるでド素人が適当に書いた音符の羅列だ。」

その発言に冬獅郎は怪訝そうになる。

一方、京楽は楽しそうに口元に笑みを作る。

「曲が成り立たせるルール。…音楽に付きまとう規則を一切無視する。それが君がここに来た一番の理由だろ？」

「はい」

冬獅郎が熱心に音楽について語った、あの時を思い出す。あれほど熱く語った彼を、京楽はあれ以来見ていない。

「それが譜面と云う形になっている。そして、君によって音楽と云う形になるうとしている。」

冬獅郎はやっと京楽と目を合わせた。

「・・・でも、これはいくらなんでも無茶苦茶だねえ。手直しが必要そうだ。…演奏予定はあるの？」

「定期演奏会で…。でも、それはアイツ等が良いって言えばの話で」

「まあ、それを気にする必要な無いだろう。」

「？」

「演奏会、楽しみにしているよ。」

「京楽先生！」

部屋を出て行こうとした京楽を、冬獅郎は思わず呼びとめる。

「今は、君が思い描く音楽を、理想を追い求めていけば良い。若いうちに出来ることを、学校に居る間にできる事を、今しかできないことを、全力で取り組みなさい。余計な事を考えたりせずに、あの頃の情熱を思い出して。」

言うておくことはそれだけだよ〜っと言って、京楽は部屋を後にした。

「ありがとうございます……ます」

小さく呟いた冬獅郎の声は、震えてほとんど音にならなかった。

「時間が過ぎるって、早いね」

「そうだな…。」

初めて定期演奏会のメンバーが決定してから二週間が経過した。つまり、今日は定期試験日。

声楽の織姫と、指揮の冬獅郎はすでに試験が終わっている。なので、今日の授業は休み。

しかし、皆の腕前を聞く為。ただの興味本位。応援。お遊び。2人は適当な理由を携えて、試験会場のコンサートホールに来ている。

このコンサートホールは学校の敷地内にあり、定期試験には中ホールが使われている。

ちなみに、定期演奏会は大ホールだ。

「客席から見ると、余計に広く感じるね」

「そうだな…。井上は大ホールには入った事」

「ないよ〜」

冬獅郎の言葉を途中で切るようなかたちで織姫が答えた。

「大ホールだから、これよりもっと広いつて事だよね？」

「…ああ、国内最大のホールと言っても良いだろ。こここの比じゃねえ」

「すっごい。いつか私もそこで歌いたいな〜」

「歌う、ぞ」

「え？」

織姫の目が真ん丸になる。

「井上！ 選抜メンバーに自分が選ばれていたこと忘れてねえだらうな！！」

「え？ でも、あれはマスコットのな？」

「違うぞ。ちゃんと演奏に参加してもらおう。勿論、歌で。」

「本当！？ 私、嬉しいよ。ありがとう、冬獅郎くん！」

「抱きつくな！ 始まるぞ」

「はい」

そう言うと、織姫は冬獅郎から離れた。

近くに人はいない。冬獅郎は心なしかほっとした表情になった。

もうすぐ、一組目の演奏が始まる。

一組目は前回と同様。斑目の率いるグループの演奏だ。

今回は前回のメンバーに加え、鍵盤楽器が加わった。そのお陰で、前回とは異なり、大分やり易かっただろう。

前回の演奏もこの場で聞いていたが、今回の方がチームとしての連帯感が強い演奏だった。

余り知られていないことだが、この試験の合格基準はチームの連携と楽しんで演奏をおこなえているか。

当たり前、簡単、そんな事を要求する為の試験だ。

斑目達は問題ないだろう。

遠めなので解りづらいが、1人1人の顔に笑みが浮かんでいる。

「大丈夫そうだな。」

「うん。何よりも、朽木さんが楽しそうだもん」

井上の言うとおり、朽木の顔が生き生きとしている。

朽木がそんな顔をして演奏しているところを初めてみた。演奏会でも、今みたいな顔をしてくれればいいと思う。

「次は・・・」

多くの学生が演奏していく。

知らない顔ばかり。しかも、実力は微妙。そうなれば、聞いている方はヒマになってきてしまった。

それは俺だけではなく井上も同じだったらしい。

「次は誰？」

「次は・・・、選抜のサクソフォン四人だろ。あの四人はいつもセットみたいなもんだ。大丈夫だろう。」

「うん、そうだね。」

思っていた通り、あの四人の演奏は群を抜いていた。

楽器の長所を生かした、考え抜かれたバランス

どうすれば観客の心を惹くのが計算された、編曲方法  
悲しそう

しかし、どこかに可憐さを秘める

この演奏に文句は無いだろう。ここも大丈夫だ。

次は石田と黒崎たち。

試験はどんどん進んでいく。

次は黒崎君と、石田君たちの演奏。  
どんな演奏になるのかな。

「黒崎の奴、緊張してんのか？」

「本当だ。私が見た事がないくらい緊張してるみたい」

手にヴァイオリンを持った黒崎君は、いつもより眉間のしわが深い。それに対して、石田君は普段の演奏会の時と同じような涼しい顔だ。この2人の対比が可笑しくって仕方がない。

そう思っているうちに始まった演奏。

何処のグループも似たような編曲方法。だから、どこが上手で下手かが嫌というほど解ってしまう。

黒崎君たちは鼻肩目な手で、上手、だと思つう。

洗練された綺麗な和音

滑らかに繋がれたスラーから覗く丸みを帯びた音

時々交わる2人の視線

その後の息のあつた連符

一切が乱れず、色濃く音がホールの隅々にまで行きわたる

冬獅郎君の言うとおり、ここも問題ないだろう。  
演奏が終わった後の黒崎君の眉間には、初めの様な皺はなくなっていた。

「いいな」。今みたいな演奏を聴いてるとね、楽しそうだなってとか、私も加わりたくなつて思つちゃうんだ……。」

思わず呟いてしまった。隣に座っている冬獅郎君に聴こえてしまっただろうか。

何も反応がないので、聴こえていなかったのだろうか。よかった。

「声楽だから、簡単には中には入れないのにね……」

今度は口の中で言う。

誰にもまだ、悟られてはいけない。この道は自分自身で選んだ。だ。

挫けたり、負けそうになっても立ち上がらなくちゃ。

「井上、何か言ったか？」

「ううん。何でもないよ。」

もしかしたら、置いていかれるのが嫌なのかもしれない。

本当に小さな声だった。

確かに、俺の耳に入ってきた。

「いいな。今みたいな演奏を聴いてるとね、楽しそうだな。とか、私も加わりたくなって思っちゃうんだ……」

悲しそうな、そんな声。

「井上、何か言ったか？」

「ううん。何でもないよ。」

はぐらかされた。聞かれたくなかったのだろう。

其処で思う。井上も俺と似たような思いを持っているのか、と。楽器を演奏する奴が近くに居る指揮科や声楽科の奴は、必ず思う。羨ましい。あの輪の中に入りたい。でも入れない。しかし、それは間違いだ。

輪の中に入れないじゃねえ。入って行こうとしていないだけだ。これは他人に言われて納得のいくもんじゃねえ。身をもって体感しなきゃならねえ。井上にこのことを気づかせてやる。俺に、新たな課題が出来た。

何だかんだでもう最後の団体だ。

市丸の所も問題は無かった。他の皆についてもそうだが、次は違う。

よりによって、定期試験の問題児が一番最後ってどうなんだよ。先生たちは、またアイツがボイコットすると決めつけてやがる。来ないことが前提なんだろう。今年も例外無くアイツはやって来ないと。

舞台袖から出て来た。

ライトに反射して黄金に輝くトロンボーンとその主。そして……

最後のグループだからかな。試験を終えた皆が会場に入って、

客席はいっぱい。

立っている学生もいるくらい。会場がざわめく。

舞台上にライトが当てられた。そこに颯爽と現れたのは、トロンボーンと……

「ピアノ科の綾瀬川弓親……」

「やっと定期試験に来やがった」



「あいつの実力、偽物じゃねえだろうな」

私の後ろの席の誰かが、そう言っていた。

18) I c h b e n e i d e s (後書き)

スラー・複数の音符に掛けられた弧。 掛けられた音符を滑らかにつなげ、ひとまとまりになるように演奏する。 slur。

「信じられない。」

「嘘だろ。」

そんな声があちらこちらから聞こえてくる。

「あの女王蜂・綾瀬川が出てくるなんて!？」

それもそうだろうが、そこまで驚く必要があるのか？　アイツにしては珍しく、学校で練習してかじゃねえか。

って、おい。　女王蜂って何だ。

そんな俺の困惑を読み取ったのか、井上がこつちを向いた。

「確かに、噂だけ聞いてると女王蜂みたいだね。　自分は巢から出ずにいて、引越しの時だけ出てくるんだもん。　あとは家来にまかせつきりで。　多分、この噂にはよく知らない人の適当な考えが含まれていると思うけど。」

私も噂でしか聞いた事がなかったらから信じちゃいそう、という井上の発言には頷ける。

自分が動きたいとき、動く必要がある時だけ動く。　他人の事はお構いなし。　噂だけでは確かに女王蜂だ。

それに、全ては自分の都合次第みたいな奴だ、って斑目も言っていた。

しかし、その心中は実際とは異なった色を帯びている。

2人とも、舞台の上で立ち止まった。　いよいよ、演奏が始まる。　会場が鎮まった。

一瞬詰まったかのように聴こえた音は、決して間違いなどでは無く  
編曲方法は、まさかのジャズテイスト  
さつきまでの印象とはガラリと会場の色が変わった  
滞っていた水の流れが、再び動き出す

これをどっちが演奏しようと言いだしたのだろうか。  
舞台には2人だけ。当然、人数が少ない分パッセージが合わせや  
すい。そして、期待を裏切る事なく確実に合わせてくる。

「おい、綾瀬川ってこんなに弾けたのか？」

演奏中であるにも拘らず、こんな声が聴こえてくる。  
たしかに・・・この前の演奏とは色艶が違う。檜佐木についても  
同じことが云える。この短い期間で急成長を遂げやがった。  
演奏は一瞬で終わり、会場が演奏の余韻が冷めた時には、舞台に2  
人は居なかった。

俺は井上と会場を後にする。  
外はすっかり暗くなっていた。

「井上、この後何かあるか？」

「何も無いけど・・・？」

「少し付き合ってくれ」

「わかった」

「とーしろー！！」

「冬獅郎じゃねえ、日番谷先輩だっ！」

反射的にそう答えて振りかえった先には黒崎と石田が。

「黒崎。君はよくこんな所で大声を出せるね」

「いいじゃねえか。ちゃんと気付いてもらえたんだしよ」

「黒崎、うるせえ。」

「悪い。冬獅郎は今からどうすんだ？」

「はあ…。黒崎にはまだ見せないつもりでいたが、仕方がねえ。ついて来い。」

「なんだ？」

俺は三人を従えて、部屋へと戻る。

どうせ、石田は今日の演奏の出来を聞きに来たのだろう。黒崎は興味本位だ。・井上は俺が連れて来たが。その見返りだ。これくらいは協力してもらいたい。

「これについて、意見が欲しい」

やっと、他人に見せる気になれた。

三人の目の前に突き出したのは、俺が作曲した曲のスコアだ。井上と黒崎は目を丸くして、俺とスコアを交互に見る。石田は俺が何を言いたいのかが解ったのだろう。早速、スコアを開いた。

「冬獅郎君。これって…。」

「つくったのか？」

「まあな。グダグダ過ぎて、先生にはド素人の落書きだ、とまで言われた。」

あの時に言われたのとは少し表現方法は違うが、内容は同じだ。

「…あとは歌詞だけ、か」

「どう思う。コレは曲か、それとも只の落書きか。曲だと云

えるのであれば……」

「僕は演奏したいよ」

「……っ！」

そう言われて、正直に嬉しい。だが、同時にこれで良いのかと思っってしまう。

「これかー！ 冬獅郎君が言ってくれてたのは」

「俺も、文句でも言っつてやろうかと思っつてたけど……楽しそうじゃねえか……」

「ありがとう」

果たして俺は、素直に礼を言えていただろうか。感情は伝わっただろうか。

「じゃあ、次には皆の手元に譜面が渡る……？」

「そのつもりでいるんだが……。まだ、もう少し手直しも必要だからな。石田、手伝ってくれるか？」

「勿論」

「そっかー。歌詞はどうするの？ 私も手伝う。」

「井上は何語が得意なんだ？」

「うーん。ロシア語は無理だから……それ以外なら大丈夫だよ。」

「そっか……。黒崎」

「何だ、冬獅郎？ 俺も何か手伝いを」

「黒崎の仕事は、この事をまだ誰にも言わないことだ。」

「はあ？」

「あと、市丸・碎蜂・綾瀬川を今すぐ探して来い。そして帰って来るな」

「どうしてだよ」

「はやくしろーっ！」

「ひいついいいいい」

黒崎は猛ダツシユで逃げるかのように去って行った。  
何も考えていなさそうに見えたが、大丈夫なのか？

「2人はもう少し此处に居てくれないか？」

2人は頷いた。

「打ち合わせと、最終仕上げだ。」

19) K?niginnebene (後書き)

パッセージ：メロディーの間を急速に上行・下行する経過的な音符群。経過句。



その後、一護に言われてやって来た三人に、冬獅郎は何も言わず、スコアを見せる。

受け取った三人はそれを黙って開き、見ていた。

沈黙。

スコアに集中しているから仕方がない事なのだが、冬獅郎にとっては耐えがたい時間。

「良いんとちゃうか？」

その沈黙を破ったのは市丸だった。

「何も考えていない様で洗練された音符の羅列。」

「お世辞か」

「そんなん、君が嫌いやって事くらい僕は知ってる」

冬獅郎の目が見開かれる。嬉しいような、でも複雑な色を帯びて。

「俺、は、これをやりたいんだが…」

「細かいことを指摘し出すとキリがない。だが、決して悪いわけではない。」

自信がなさそうな声で言う冬獅郎に碎蜂はハッキリと言う。

「異存はない。日番谷がやると言うのであれば、我々は反論しない。」

「僕は何だって良いよ。僕に弾けない曲があるのであれば、持

って来てほしいくらいだから」

従順な意見。 挑戦的な意見。

皆、言っている事は様々だが、要は同じ。  
共に演奏しよう。

「…ありがとう」

日番谷冬獅郎の新たな挑戦が始まる。

この曲について、日番谷の考えが思入れが爆発する。  
皆はそれを黙って聞いている。

「空白部分は自分で考えてくれ。俺からの要求は一切ない。  
その部分を短くしても長くしても良い。譜面に名前が書いてある  
ところは、俺が演奏しろと指名したと思ってくれ。」

普通ならあり得ない。  
しかし、そんなことは今更だ。

「第一楽章が市丸。 第二楽章は井上。 第三楽章が碎蜂率いる  
四人。 第四楽章は綾瀬川。 つまり、此処に居るお前等が主役を  
やるんだが、第二楽章と第四楽章には準主役を用意している。」

冬獅郎は織姫と雨竜を見る。

「第二楽章は石田だ。途中で井上との掛け合いがある。あと、  
第一楽章の途中に黒崎との掛け合いも用意した。」

「わかったよ」

石田は眼鏡を上げながら答える。そこには、必ずやり遂げると云う自信しかない。

冬獅郎は満足そうにそれを見た後、次は弓親を見る。

「問題は、第四楽章なんだが・・・」

「何？」

「初めはティンパニと考えていたから、そのつもりで其処には書いてあるんだが・・・」

確かに、第四楽章の中ほどにはティンパニとピアノしか音が記入されてはいない。

「どうすつかな・・・」

「どうして迷うのさ」

弓親の問いに答えず、冬獅郎は市丸を見る。

「今日の演奏は聞いてたか？」

「僕は聞いてたよ」

「どうだった。綾瀬川と檜佐木の演奏は」

弓親は皆を見渡す。

他から聞いた、観客席から聞いた出来栄えが気になるのだろう。

「私は楽しかったよ」

一番に答えたのは織姫だった。

「正直、同じような演奏ばかりで飽きちゃってたって云うのもあるかもしれないけれど」

「僕は短期間でよく合わせたなって感じやなあ。君らって仲悪いのと違ったん？」

「どうやら、綾瀬川と檜佐木は仲が悪い」と云う噂があつたらしい。それも仕方がないだろう。

試験の組み合わせが決まった時、弓親が一方的に修兵に喧嘩を売つたようなものだから。

「いいえ、彼との仲は良くもなければ悪くもないですよ。」

弓親は先輩からの問いかけに丁寧に答える。

「皆さんが知つての通り、僕が彼に対してあんな感じでしたからね。4日くらい前までは皆さんの御想像通り、仲は悪かったですよ」

「それであるの演奏やったら凄いなあ…ってそれは知ってたん？」

市丸は冬獅郎を見る。

「ああ、檜佐木に毎日聞いてたからな」

「・・・何の報告やの」

「そんな呆れたような風に言うんじゃない。俺が聞いてたんだよ」

「そーなん。まあ、どうでもえーけど。今の話と何が関係あるん？」

「…迷つてんだ」

「まさかティンパニを止めて、トロンボーンにするつもりなん？」

「ああ。でも、こういう場合はティンパニの方が無難か・・・」

？ 綾瀬川はどう思う？」

「どっちでも良いですよ。まあ、意外性を追求するならトロンボーン、かな」

「じゃあ、それで書き換える。」

案外、軽いノリで決まって行く。

「本日は解散。わざわざこんな時間まで有り難う。また連絡を入れる。それまで、今話した事は黙っていてほしい。」

先日、定期試験が終了した。

しかし、結果発表まで、まだ時間がある。

国内のコンクールに向けて心機一転、力を入れている者。合格をさっさと諦めて、再試験に向けて練習に励んでいる者。皆様々だ。定期演奏会のメンバーに選ばれて者も例外ではなく、コンクールに向けて練習に入った者が少なくは無い。

「このまま、何の連絡も入って来なかったら、定期演奏会の事を忘れてしまいそうだね」

「ああ？ そういえば、んなもんがあつたなあ」

「まさか一角、忘れていたのかい？」

「弓親は覚えてたのかよ」

「もちろん。それに、そのメンバーだけを集めて打ち上げみたいな事をするらしいよ。」

「そついや、松本から連絡があつたな」

「行くのかい」

「ああ。弓親は行かねえのか？」

「行くよ」

今回は余裕があるからね、つとって弓親は部屋の窓を開け放つ。すると、そこからカーテンを割って日差しを連れて秋風が入ってくる。

「寒い、閉める」

「ヤダ」

外からは、まだ元気が有り余ってそうな、学生の話声が聞こえてくる。

「妙な気分だよ」

何が、とは声を出さずに目線だけで一角は弓親に問う。

「この時期にちゃんと試験が終わってるのは、さ」

「それが普通だ。弓親が変なだけだろ」

「ふふっ……そうだね」

よっぽど機嫌がいいのか、弓親は笑うだけでいつもの様にキツク言い返さない。

「楽しそうだな」

「そう見えるかい？」

一角の言った事は本心。それは解っているが、弓親は問い返す。

「……去年。一角が僕に言ったことが解ったような気がしてさ」

「？……ああ、あれか」

去年の今頃。あの時もこの様にして、一角と弓親は話していた。もう、一年も経ったのか。

君たちの演奏、お世辞にも美しいとは言えなかったよ。僕からすれば酷かったね。

うるせえ、それでも構わねえ。

どうしてさ。下手すれば再試験だよ。

てめえに再試験の事を言われる筋合いはねえよ。 …ただ単に、楽しかったんだ。

「はあ？ 楽しかった??」

今日の演奏で、“原点回帰できた” つつても過言じゃねえ。音を楽しんだんだよ。

ふうん、そう。 そんな甘っちょろい事を言っていると、今回のテスト、落ちるよ。

そんな簡単に落ちたりしねえよ。

しかし、あの時と違うこともある。

選抜メンバーとして定期演奏会と大分先に控えている事。 そして大きな違いは、弓親が試験を受けたと云う事。

「どうだったんだ」

「悔しいけど」

その言葉だけで十分、一角に意味が伝わる。 本人は認めたくないのだろうが、その答えは、もう認めたも同然だ。

「…思いださされたよ。 僕より、知識も才能も全然ない彼によつて」

弓親の目が細められる。

一角は、そんな弓親の表情が好きだった。 しかし、弓親は外を向いてしまった。

小鳥の囀りが聴こえる。 風が木と共に歌う。

「さ、コンテストに向けて練習するんじゃないのかい？」

「てめえが窓を開けるから出来ねえんだろ」



「別に、君の音なんて皆、聞いちゃいないさ。」

弓親はやっと、一角の方を見た。

風が弓親の髪を弄ぶ。

「だって、外にはこんなに音楽が溢れているのだから。」

弓親はそう言って、部屋を後にした。

定期試験が終わった。その打ち上げとの名目で飲み会が行われている。

始まった時はまだ日が結構高かったのだが、もうすでに日が暮れていた。

「修兵。あんたって弓親と仲良かったの？」

「はい？」

「だーからー」

金髪美女・乱菊は修兵に詰め寄る。

「この前の演奏が余りにも良かったから、ちょっとね」

「仲は良くもなければ悪くもないっすよ」

「なに、その返事。こたえになってない」

乱菊の頬はほのかに赤くなっている。完全にアルコールが回っている。

ガシツと乱菊は修兵の首元を掴む。

「修兵っ、嘘はダメよっ!! 男なら、潔く話しちやいなさいよ」

「何をっすか」

「もう良いわ」

そう言った乱菊はフラフラと市丸の傍まで歩いていき、座ると同時に眠ってしまったようだ。

修兵には、乱菊がそこまで酔っている様には見えなかったのだが。

「あら、眠ってしまったわけですね」

「ああ。乱菊さんは何を聞きたがってたんだ？」

知ってるか、っと修兵が問うのは、修兵の横に腰を下ろした七緒

七緒の手にはチューハイが握られているが、その顔色は普段と一切変っていない。

「さあ…酔っていただけ？」

「かもしれないな」

「せんぱーい」

赤髪が修兵に声をかける。

そして赤髪は修兵に抱きついた。

「どうした、酔っ払い。くつつくな、離れろ」

「酔っ払いじゃないっすよ。恋次っす。」

「はいはい、阿散井くん。せんぱいが困ってるから、抱きつくのはやめようね」

それを金髪ほどが解くと、今度は金髪がひつついた。

「そういう吉良もひつついてんじゃねーかよ」

さきほどから、赤髪・恋次と金髪・吉良の呂律が回っていない。要は2人とも酔っているのだ。

「おいおい、2人とも」

「「なんですか、せんぱい」」

「こついう所は妙に息がピッタリだ。

「明日からコンテストに向けて練習始まんたる。 さっさと帰れ」

修兵は自分の開いている隣を奪い合つ後輩を、優しく見つめながら言う。

「嫌ですよ。 せんぱいと飲める日なんて滅多にないんですから  
「それに、せんぱいはいつも、こついう場で俺たち以外の人と話  
してるじゃないっすか」

「いや、今も伊勢と」

「先輩、飲んでますか？」

「足りてますか？」

「・・・」

酔つ払い相手に何を話しても無駄だ。 そう思ったのか、修兵は何も言わない。

「おい、れんじ、はなれたまえ。 ひさぎどのがこまっておられ  
るだろう」

もつと、酔っているヤツが来た。

朽木家の令嬢。 その名はルキア。 完全に酔っている、ここに  
いる誰よりも。

「まだらめ先輩がよんでおられたぞ。 あと、さっき市丸せんぱ  
いが・・・」

「おい、恋次っ！」

「イツル、居まる？」

「今行きます」

本当に、同級生である2人の息はピッタリだ。  
ルキアはそんな2人を連れて、元の席へと戻って行った。

「潰れなきゃ良いが」

「このままでは回避できないでしょうね…。」

七緒はため息交じりに言葉を続ける。

「このまま残って、酔っ払いの世話をするのか。」

「それとも、さっさと逃げちまうか」

七緒と修兵は目を合わせる。

修兵は乱菊に薄い羽織をかけて、重い腰を上げる。

「どうする？」

「私も」

2人はさっさと、宴会場と化した場から逃げ出した。

どうせ、今出て行ってもバレないだろう。そう思って、2人は抜け出した。

吹いた夜風は決して強くは無いが、それでも少し肌寒い。

「風が冷てえな、大丈夫か」

「ええ、大丈夫」

そう言う七緒は少しの段差でよろけた。

それと咄嗟に修兵は支える。そうして2人肩を寄せている姿は、まるで恋人の様。

「伊勢って顔には出さねえだけで、実は酔ってんのか？」

「そう、みたい。修くんは酔ってないの？」

久しぶりに懐かしい呼び名で呼ばれて、自分に肩を預けたままの彼女を見て、修兵はやっぱり伊勢も酔っているなと感じる。

「俺はそこまで酔ってねえよ。送るか？」

「…大丈夫だから、ありがとう、修くん。」

修兵に肩を預けて居ることを思いだした七緒は、そう言いながら修兵から離れる。

その顔は少し赤い。

「それよりもうすぐで皆、出てくる。此処に居ると邪魔になっちゃう」

「それもそうだな」

中で騒いでいたはずの団体が相変わらず騒いでこちらに近づいてくる。

店側に追い出されたのだろう。いくらなんでも、長居のし過ぎだ。店からすると迷惑に違いない。

「せんばーい、どこっすかぁ？」

「げ、もう来やがった。俺は気付かない振りして退散っすけど、伊勢はどうするっ。」

「行きます」

「じゃあ」

そう言って、修兵は七緒に手を差し出す。

「？」

「酔ってんだろ。危ねえだろうが」

くすつと笑って、七緒は素直に手を取った。しかし、それではなんとなく不安な気がして、七緒は修兵の腕に自ら腕を絡ませる。驚いた顔が七緒の顔を覗く。

「酔っているのです。危ないですから」

「仕方ねえな、後々知らねえぞ」

「修くんなら構いません。兎に角、この場から離れたい」

「七緒ちゃんが言うなら…仕方ねえかな」

くすくすつと笑って、2人は闇に消えて行った。

それを皆が遠くから見ていた。もちろん、それに2人は気が付いていない。

そして、皆には2人の会話は一切聞こえていない。

「嘘つ、てつきり修兵は弓親と付き合ってるのかと思ってたわ」

「乱菊さん。それって男同士っすよ」

「あのね恋次、」

まるで哲学でも語るかのように乱菊は片手を腰に当てながら、恋次に話しかける。

「世の中なんでも有りなのよ、特に芸術家は。その辺りの事に  
関しては寛大だから、自由だから。」

「なんっすか、それ」

恋次は肩にいる吉良を担ぎなおしながら言う。吉良は酔い潰れて  
しまつて、自力では動けなくなっている。眠っている様にも見え  
る。

「それにしても、恋次つて酔いがさめるのが早いわね。吉良は  
こんなんになつてるのに」

「乱菊さんこそ。それに今日の俺はそこまで飲んでないっすよ」

「あら、私もよ。もう一軒行く?」

「エンリヨしておきます」

「遠慮なんかしなくたって良いのに。つまらないわー」

また飲みに行きましょうね、と言って乱菊は市丸の元へと駆けて  
行った。

皆はそれぞれの家に向かって帰っていく。  
その中、1人真っ青になっている少女。

「おい、ルキア。大丈夫か?」



「ノミスギタ」

「お、おい！ 俺以外の誰かに世話してもらえっ」

「ナニヲイツテル、恋次。他に誰がのこっているというのだ」

「誰か助けて下さーいっ！」

今更助けを求めたって誰も来ない。

後の祭り。

「先輩、昨日はいつ帰ったんスか」

「てめえ等が店から出てくる少し前くらい」

「え？ じゃあ、僕たちが店を出たのを知ってて先に帰っちゃったんですか」

「そうだ」

ここは昼下がりの食堂。

人影は余りない。

「酔いつぶれた可愛い後輩を放って帰ったんスか」

「阿散井、てめえは可愛くなんかねえ。 だいたい、てめえは元氣だっただろうが」

「だってさ、阿散井くん」

「うるせー、吉良。 先輩、吉良も可愛くないですよね」

「吉良ー、可愛いぞー」

「ありがとーございます、先輩ー」

よしよし、と修兵は吉良の頭を撫でる。 知らない人が見れば、異様な光景。

「それってズルくねえツすかあ？」

「仕方ねえ、これがてめえと吉良の差だ。 精々、てめえは斑目にでも可愛がってもらえ。」

「嫌ですよー、あの人…」

「なんだー、恋次？」

噂をすれば影。 恋次の後ろには眉を吊り上げた顔の一角が。

「いいえ、何でも」

「斑目、恋次がてめえにレッスンして欲しいってよ」

「そうか。 今すぐ来いっ。 じゃーな」

一角は恋次を引きずって去って行ってしまった。 それを可笑しく見ていると、修兵の携帯電話に連絡が入る。 少ししてから吉良にも。

一斉メールの送信者は日番谷冬獅郎。

本文にはシンプルに一行。

今から譜面を配布する。

それだけだった。

修兵と吉良は顔を見合わせる。

「どこでだ？」

「いつもの練習場所では…？」

「じゃあ行くか」

「はい」

2人は急いで向かった。

そこにポツンと1人で居たのは日番谷冬獅郎。  
只でさえ広い空間が、余計に広く見える。

「檜佐木と吉良か。お前等が一番だ」

そう言いながら、冬獅郎は譜面を手渡す。

「これは？」

「俺がかいた」

曲名は「Color」。

楽器名の横には奏者の名まで記されている。1人1人、冬獅郎が  
指名していったのだ。

「それは次の時に詳しく説明する。今は各々の活動に向けて頑  
張ってほしい。また、連絡を入れる」

「わかりました」

「あと、まだ来てねえ奴には声をかけてもらえるとありがたい」

「わかりましたよ」

「すまない、頼んだ」

修兵たちは冬獅郎を一人残して部屋を後にした。

「先輩」。

「また阿散井か」

「今日はいつもより一段としつこいですね」

「吉良、んな事言うんじゃねえ！先輩、あの・・・」

「七緒とはどうなの？」

「乱菊さん!？」

いきなり現れたのは松本乱菊。その右手にはフルート。

「だから、私たち昨日見ちゃったのよ」

「たち? どういう事ですか、松本先輩」

不思議そうに吉良が尋ねる。

「ええ、吉良は寝てたから知らないと思うけど恋次は見てたから」

「おい、阿散井。さっきの会話と微妙にズレが生じてんだが」

「気のせいっすよ」

「その時、私たちは見ちゃったのよ。修兵が七緒と仲良く帰っ

てくのを!!!」

「「ええー!!!」」

まるで初めて聞いたことかのように阿散井と吉良は驚く。まあ、吉

良は初めて聞いたのと同じ状態なのだが。

「おい、阿散井。吉良と一緒にあって驚いてんじゃないねえ」

「先輩、その発言は認めても同然じゃ...?」

「げ、しまった」

「デカしたわよ、吉良! さあ、修兵。正直に答えなさい。」

「アンタと七緒は...」

「そのような所で何をしているのです」

そこに現れたのは、渦中の人。伊勢七緒。その背には、ホルンを入れるライム色のケースが。

「七緒! 良い所に来たじゃない!!!」

「何でしょう、松本先輩」

「七緒は修兵と付き合ってたの？ 隠したって無駄よ。昨日、仲良く2人で帰って行ったのを見たんだから」

「それはっ」

七緒が助けを求めて修兵の方を見ると、カチツと目があった。そして互いに固まる。

すると、扉が開いた。

冬獅郎が不機嫌そうな顔で立っている。

「おい、いつまでこんな所に居るつもりだ？ 松本、コレ。」

「え、これって！ 凄いわ…。」

「こっちは阿散井と伊勢の分」

「自分で作曲したんスか」

「ありがとうございます」

「そうだ。詳しい事は後日。連絡を入れるまで、各自行うべき事をやれ」

「わかりましたー」

冬獅郎は再び部屋に戻ってしまった。

「で、どうなのよ。ってアレ？」

「見事に逃げられましたね…。乱菊さん、どうします？」

「兎に角、探し出すわよっ！ 恋次、手伝いなさい」

「わっわかりました」

そっとしておこうよ、そう思う吉良だったが、乱菊が相手では何も言えなかった。

呼吸を整えて、七緒が話しだした。

「どうしてあのような話になったのですか」

「昨日、一緒に帰ったところを乱菊さんと阿散井が見ていたらしい」

2人が逃げて来た先。それは、普段、修兵が練習場をして使用している部屋だった。

修兵は窓際に立っており、七緒は椅子に座っている。

「それで…。仕方がないと云えば仕方がありませんね。」

修兵も七緒もあの時の記憶がハッキリと残っているようだ。

「乱菊さんなら、このまま噂を広めかねえ。」

「それを訂正して回るのは少々大変ですね」

「じゃあ、いつその事…。付き合ってみる？」

「え」

修兵はそう言って窓の外を見る。

七緒の位置からは、自分に背を向けている今の修兵の表情が見えない。おどけているのか、それとも…。

七緒にとって、この一瞬がとても永く感じられた。すると、修兵は急に振り返って七緒に言う。

「ヤベっ、見つかった。伊勢、隠れる」

修兵が立っていた窓は学生門がある方の窓ではなく、隣の棟が見える窓。

「はい!？」

「もしくは、ここから離れる。乱菊さん達がもうすぐ来る」

向こうから走って来る金と赤が見えたらしい。

「そういう貴方はどうするのですか」

「なんとかなるだろ」

そう言いながら、修兵はトロンボーンをケースから取り出す。

「逃げねえなら、練習に付き合って」

動く様子のない七緒に、修兵はマウスピースに口を付ける。

トロンボーンとピアノのためのソナタ『ヴォクス・ガブリエリ』

返事も聞かずに演奏し始めた修兵に呆れながらも、七緒は演奏に耳を傾ける。

出だしの中低の響きが美しく

軽快さの中にも、どこか隠されたものがあって

力強さも欠けてなどなく

聞いている者は皆、彼が作り出す音楽の世界へと吸い込まれていく

これがピアノと一緒になればどうなるのだろう。

修兵がこのような曲を練習している姿を、七緒は初めて見る。



一通り演奏を終えると、また演奏を始める。  
何か意見を求められるわけでもなく、七緒は手持無沙汰。このトロンボーン奏者は観客が欲しかっただけの様だ。  
このままでは七緒もたまったものではない。彼女も練習しなければならぬ曲があるのだ。

「自分だけ観客に聴いてもらって不公平です」

曲の切れ間に七緒が言った。すると、修兵は口から楽器を放す。

「じゃあ、演奏しろよ。…そういや、こうして伊勢の演奏を聴いた事なかったな。」

「そんな事を流暢にしていられる程、お互いに暇ではありませんからね。」

付き合いの長い二人だったが、互いの演奏をこんな間近で聴くのは初めての事だった。

七緒はケースから楽器を取り出す。朝顔を器用に回し、楽器を形にする。

「コンクールにやっと出る気になったのですか？ 国内のはまだ出ていたようですが、今回は国外？」

「…ああ。」

珍しい、と呟いて七緒は譜面台に譜面をのせる。

榎佐木修兵という男は今まで、目立つことを何よりも嫌い、それ故にか、国内のコンテストに時々出場していただけだった。

そんな男があのような選曲をしたということは、それなりの大会へ出場すると云う事。

七緒は考察をやめて、深呼吸をする。

極限まで集中力を高める。

ヴァルトホルンと管弦楽のための協奏曲変ホ長調

リヒャルト・シュトラウスが19歳の時、ホルン奏者である父の為に作曲。

シュトラウスは2曲のホルン協奏曲を世に残している。この作品の60年後に『第2協奏曲』が作曲されたため、『ホルン協奏曲第1番変ホ長調』と呼ばれることもある。

それを七緒は一気に吹き上げた。

25) W?hrend einer Flucht (後書き)

マウスピース・管楽器の吹き口。mouthpiece

トロンボーンとピアノのためのソナタ『ヴォクス・ガブリエリ』；

クロアチア出身であるステファン・シュレツク作曲。トロンボーン・ソナタ『天使ガブリエルの嘆き』とも。

朝顔：奏者が右手を入れている、ホルンのベルの部分。

ヴァルトホルンと管弦楽のための協奏曲変ホ長調 (Zweite  
s Konzert Es-dur für Horn und  
Orchester) ; リヒャルト・シュトラウス作曲。3楽章か  
ら成り立っており、シュトラウスが交響詩などの作曲に着手する前  
に作曲された。

「予選までもう時間がない…。」

雨竜はそう呟きながら、譜面とスコアの両方に目を向ける。その手元には別の紙を持って。

先ほど、冬獅郎から新たな譜面を受け取った。しかし、それに目を通す余裕が今の雨竜にはなかった。

思い出される、2ヶ月前の出来事。

「これで成績を残してこい」

突然、滅多に口を利かない父親が一枚の紙を渡し言った。

「これくらい、どうって事は無いだろう?」

その目から、意図するものが何なのかは読めなかった。

父親の言葉に従うつもりなど一切ない。しかし、世界での自分の実力が何処にあるのかを知りたい。

渡されたのは『新人・国際音楽コンクール、ヴァイオリン部門』

の広告。

これは世界有数の大規模コンクールで、集う奏者も一流。国内で上位を争うくらいの若手（25歳以下）が参加する。

「おい、石田。珍しいな、おまえがポーツとしてさ」「何でもない」

突然ノックもせずに見れた一護にそう言って、雨竜は広告をしまつ。それに一護は気が付かない。

「それより、黒崎。どうして君が此処に居る」

此処はいつも雨竜が練習に使っている部屋だ。

「いや、別に」

何かを隠しているような一護に、雨竜は嘘だと確信する。

「そういう事にしてあげるよ。」

雨竜は一護の存在を無視する事にし、濃紺のケースから楽器を取り出す。

「あのさ、俺」

「何も無いんじゃないかなかったのか？」

キツク言う雨竜に怯おそみながらも、一護は、だって…と続ける。

「そんなウザそうに言われたら誰だって」

「それは悪かったね。で、何。」

「…俺、コレに出ようと思う。」

そう言っただけで差し出されたのは、雨竜にも見覚えのある広告。

「新人・国際ヴァイオリンコンテスト、か…。」

それは『新人・国際音楽コンクール』と年齢制限も規模も同じ。しかし、審査基準だけが異なる。

「石田は出ねえの？」

「コンマスの一番を決めるコンテストに興味はない。僕は世界のソリストになるんだ。」

個人技量を競うのは勿論だが、周りを統制するカリスマ性やリーダーシップを重視する。つまり、若手コンサートマスターの一番を決める祭典だ。

雨竜には、一護がそこまでコンマスと云う座にこだわる理由がわからない。

「どうして君は」

「俺は、石田みたいな才能はねえから、ソコを買って出るなんて事は出来ねえ。でも、ソリストを支えることなら俺でも出来るかなって…。」

一護は雨竜の黒い瞳を真っ直ぐ見つめる。

「石田と俺が、一番のソリストと一番のコンマスが組めば怖いもの無しだろ？」

「黒崎…。」

「選抜でさ、一緒に演奏出来る事は素直に嬉しい。でも、やつ

ぱり。。。」

一護は扉に近付きながら言う。

「俺は石田のソロが聞きたいんだ。」

じゃあ、と言って一護は部屋を後にした。

雨竜はひとり残される。

「自分が出ようとしているコンクールの事くらい、ちゃんと調べろ、黒崎。。。」

雨竜の呟きが静かに床に落ちた。

一番に目に飛び込んでくるのは、エントランスホールの真ん中に堂々と置かれた年代物のグランドピアノ。

あの時と変わらぬ光景に喜助と夜一は目を細める。

そのピアノは誰が触れても良いのだが、エントランスはよく響くため、ピアノ科の首席奏者でさえ触れたがる者は少ない。首席奏者で且つ、自他共に認める実力の持ち主だけが、数年に一度だけ奏でる。

そんなグランドピアノだ。

「喜助、もうあれに触れても良い実力じゃろう。久方ぶりの帰還を皆に知らしめる。」

「…アタシにあのピアノはまだ早い。」

「何を言うておる。喜助をこの道に引きずり込んだ儂の言葉を信用せぬか。」

「…じゃあ、一曲を」

喜助は夜一の手を恭しく取り、言う。

「親愛なる…夜一さんに。」

夜一の小さな手の甲に口付けを落として、喜助はグランドピアノの傍にゆっくりと近寄る。そして、人差し指が鍵盤に触れた。

C

不意に鳴った音に、その場にいる者の注目を集める。

本人は一切気にする様子もなく、場の響きを確認しながら椅子を引



き座った。

「相変わらず、ピアノの横に立つと画になる奴じゃのお。」  
帽子をピアノの上に丁寧に置くと、喜助の大きく細長い指が鍵盤の上へ。

超絶技巧練習曲第5番変ロ長調『鬼火』

実力を見せつけるかのごとく  
一切ミスすることなく、紡がれる音たち  
匠にピアノを操り、観客を甘い世界に引きずり込み魅了する  
その姿はまるで、悪魔のよう

喜助の指が鍵盤から離れた。

無音

皆、呆気にとられて動くことすら出来ない。

パンパンパン

演奏を終えた喜助に近づく一人の影。

それは先日の定期試験で一躍主役の座を、望むも望まざるも、得た  
ピアニスト。

「流石、浦原先輩。」

「これはこれは、お久しぶりっすね。 ……綾瀬川サン。」

2人の会話に、喜助による音楽の呪縛が解ける。

「今、ピアノ科の一番はアナタですね？」

「そう思われますか？」

「ええ。最低でも、」

喜助は帽子を深く被りながら低く言う。

「この場に居る者の中ではトップかと」

呆気にとられて動くことすら出来ない者の内の一人ではなかつた  
弓親。

と云う事は、この中で弓親は最も喜助に近い次元に居ると云えよう。

「確かに」

「……アタシはこれで。」

「一つだけ、いいですか？」

喜助は振り返り、弓親を見る。

喜助も弓親が用も無いのに話しかけてくるとは思っていなかったのだ。

「浦原先輩は何のために鍵盤に触れて……？」

「これはまた難しい質問っスね。」

ほんの一瞬だけ困ったかのような表情を喜助は作る。

「…自分を見てもらう為っすかね？」

それだけ言って、喜助は夜一と共にこの場を後にした。  
グランドピアノの傍に、弓親が残される。

「やっぱり、あの人は天才だよ……。」

芸術は自分を一番表現できるなどと言われる。しかし、実際は嘘。

審査員の好みに合わせなければ賞は手に入らない。

残念ながら、皆は意識的にも無意識にも、審査員の好みに合わせた演奏をしている。

賞を獲らずしてプロは名乗れないから。そして、生活してはいけないから。

自分の演奏で自分を表現して、言い換えると審査員の好みに合わせた演奏をしなくても、賞を貰えるのは一握り。

それは周りを圧倒する実力の持ち主、すなわち自他共に認める天才だけ。

弓親は、浦原喜助と云う男が持論それに当てはまった天才であると再認識する。

「あの人にとって……僕なんかは敵はおろか、障害にもなり得ないんだろうね……。」

結果はついてくるもの。賞は、楽しんだ結果に貰えばいい。

そんな考えを持つことを許されるのは天才だけ。

「そんな事はきれいごと。大切なのは、全て結果。審査をする上で、過程など、誰も見向きもしない。」

「おい、弓親。こんな所に居たのかよ。いきなり部屋を飛び

出すから心配した。」

「何、一角。君でも心配する事ってあるんだ。」

「綺麗事なんて端から言うつもりもないし、信じたくもない。」

「その言い方はねえだろ」

「…一角。」

「なんだよ」

「僕、国外のコンクール受けてくる。」

でも無性に、今はその考えに縋りたい。 たとえ、どんなに無様な姿になっても。 これが弓親の今の本音。

「一番を取って来るよ。」

既にコンクールに出る事は決めていた。 だが、今覚悟が。 自信に満ちた表情で言う弓親に、一角はゆっくりと頷いた。

「もうっ！ あの二人はどこに行ったのよ！！」

「あ、あれじゃないっすか？」

恋次は向こう側の校舎を指さす。

「あら、ホント。 って、気づかれちゃったじゃない！！ 恋次、  
どうするのよ！」

「そんなことを言われても……。 なんか、音が……………?」

聴こえてくるのは、ピアノの音。

こんなに大きく聴こえてくるのは珍しい。 練習場の窓と扉を全開  
にしても、このように大きくは聴こえないものだ。

「エントランスかしら……」

「でも、あそこに楽器なんて……」

「年代物のが一台あったでしょ。 でも、あれを弾こうなんて弓  
親でもないわ」

「どうしてっすか」

「アンタは本当に馬鹿ねえ。 此処まで響くのよ！ もし、下手  
な演奏でもしてみなさい」

「……………でも、弓親さんなら大丈夫なような」

「あのピアノに触れた歴代の先輩方は、皆世界的なピアニスト。

恐れ多くて、首席筆頭くらいじゃ触れないって本人が言ってたわ  
よ」

「じゃあ、今のは誰なんすか」

「確かめるわよ」

そう言つて、乱菊は恋次の腕を思いつき引つ張る。

「乱菊さん、フルート！ 危ないっすよ〜」

片手で持たれるフルートは今にもバランスを失い、乱菊の手から転げ落ちそうになっていた。

「あぁっと。 もう少し早く言いなさいよ」

「ええー、俺のせいっすか!？」

「あたりまえでしょ」

二人はエントランスへと向かう。

そこには、魔法が掛けられていた

そうとでも表現したくなるような空間が出来上がっていた。魔法の使い手はもちろん、奏者。

皆、動かない。否、動けないでいる。

それは乱菊と恋次も同じ。

最後の一音がなり、余韻だけが空間に残る。演奏が終わってしまった。

静寂が空気を包み込む。

パンパンパン

その魔法を解いたのは、魔法をかけた本人ではなかった。少しずつ、夢から覚め始める。

「あの人……ピアノ科の浦原喜助………………。」

二階からピアノのそばで話している人物を見下げながら、乱菊がつぶやく。

「弓親ってあの人と知り合いだったの……?」

横の恋次は未だ動けずにいる。

喜助と弓親の話の内容までは聞こえてこない。

「ちょっと、恋次。 シャキツとしなさいよ！」

「……」

夢見心地で乱菊の顔を見る恋次は、乱菊からすれば間抜けにしか見えない。

「どうしたんだ」

「あら、一角。 恋次が固まっちゃって」

「……演奏してたのはどっちだ?」

「どっちだと思う?」

「・・・今のは弓親じゃねえ気がする」

一角は乱菊の横に立ち、弓親をみる。

「自信ないのね」

「最近、弓親の演奏をまともに聴いてねえからな……。」

「? 定期試験はどうしたのよ」

「アレは何時もの弓親の演奏じゃねえよ。 半分遊びだった」

「それでも良いんじゃない?」

「?」

2人は、恋次の存在をすっかり忘れている。

「どついでとだ」

「弓親ってさ、音楽に対する考えが捻くれてるっていつか……。競争に執着しすぎだったじゃない？」

「……」

「悪い事じゃないと思うわ。さ、迎えに来たんでしょ？ 行ってきたら??」

「お、おう」

一角は乱菊に背を押されて弓親の元へと行く。

不変なんてもの、世の中に有りはしないんだ



僕が今までコンサートマスターとして活動してこなかった理由。  
それは黒崎の存在があったから。

俺が今までソリストとして活動してこなかった理由。 それは石  
田の存在が大きすぎたから。

「・・・って2人は言ってたよ」

「ふーん。 ……で、織姫はそれを言いにわざわざ此処まで来た  
の？」

「だって、そうでもしないと、最近たつきちゃんと全然会わない  
んだもん。」

授業が終わった直後、堂々と教室に入ってきた織姫。 彼女は皆  
の注目を集めているのも気にせず、たつきに話しかけて来たのだ。

「さては織姫。 寂しかったんだ？」

「そうじゃないもん」

そう言って、リスの様に頬を膨らませる。

大学生にもなつて頬を膨らませて許されるのは織姫くらいだ。

「はいはい、わかつたつて。で、それは織姫にとって意外な答えだったわけ？」

「うーん。そうでもないかな。」

「じゃあ、そこまで驚くことないじゃん」

「驚いてるように見えた？」

「そりゃもう。ビックリして思わず走ってきちゃいました、つてくらいに見えてる。」

二人は教室を後にし、屋上へと上がる。

そこに人影はない。なので、思う存分、話ができるのだ。

「たつきちゃんもコンテストにでるの？」

「悩んでる。織姫は？」

「えへへっ、私も。今出ておいた方が良かったって思うけど、そうしたら演奏会まで手が回らなくなるかも……って思ったりしてね。」

「……相談しに行くか。」

「相談？」

「コンダクターとコンサートマスターに。織姫はどうする？」

「行く！」

二人は青空に別れを告げ、建物の中へと戻って行った。

「つてことで相談に来ただけど・・・」

いきなりやってきて、話し出した彼女たちに圧倒される。

「どうしたらいいかなあ？ 冬獅郎くん」

「そんなことは各自で決める。止めさせるも参加さえも、そんなことを決める権限は俺にはねえ。」

大切な大切な演奏会。

その練習を疎かすることはできない。しかし、それ以上に、皆がコンテストに出る事を止めることはできない。

「だつてさ、織姫。つて事で、出ることにするよ。」

「たつきちゃん、決断早いね……」

コンテストに出て結果を残す事は、音大生にとっては就職活動。自分をアピールする絶好の機会なのだ。

「まあ、焦る必要はないと思うよ。先輩達と違って、学生生活はまだまだあるからね。今年は勉強に費やすつても有りかもしれないし。」

「そうだよな、ありがとう、たつきちゃんに冬獅郎くん。」

「俺は何も言っていないが」

「良いから良いから。あ、それじゃあ行くね。」

「邪魔したね」

「構わねえよ」

手を振り、部屋を後にする。

「本心はどこにあるんだろ。」

「へ？」

部屋を出た廊下で、たつきは呟く。

「演奏会に集中してほしいに決まってる。でも、それを言えずにいる。」

「誰にも打ち明けることができずに、ひとりで悩んでる？」

「さつき、そう見えた。」

「なのにどうして参加するって決めたの？」

「コンテストへの応募は演奏会に出るって決まる前に出しちゃってるんだよね。だから、もとも出るつもりではいたんだ。でもさ、」

織姫はたつきの言葉に静かに耳を傾ける。

「でもさ、本当はどうかって思って。さつき、本人の前でああ言ったことで何かしら見えるかなって思ったけど……。心のうちにはそう簡単に立ち入らせてもらえないみたいだね。やっぱり、難しいや。」

「でも」

「？」

「でもね。皆わかってると思う。大丈夫。」

「相変わらず、どこから来るか分からない自信だね」

「えへへ」

笑う織姫につられ、たつきも笑う。

「まあ、少なくとも」

「私たちが、ほんのちよっぴりわかっているから。」

「行こう、織姫。授業始まるよ」

「うん」

各自、コンテストに向けて始動しはじめる  
演奏会との両立

それは容易なことではないと知っていながら

日が短い。 月が妖しく地面を照らす。  
秋風が窓の外で自由に動き回っている。

「トランペットっ！ 音が短いっ！！」  
「クラリネットっ！ 硬くなるなっ！！」  
「黒崎っ！！ 余所見すんじゃねえっ！！！！」

日が沈んだ今も尚、ある部屋から罵声が飛ぶ。 それはコンダクター、日番谷冬獅郎の声だ。 それはコンダクター  
演奏会まで、あと半年はとっくに過ぎた。 練習が出来るのは、後  
4カ月。

「兎に角、黒崎。 てめえが変な事をするな！ ……とりあえず、今日は解散。」

それだけ言って、指揮者が出て行く。 こんな事、今日が初めてではない。

「ったく、どうして俺なんだよ。」

「気がついてなかったのかい？」  
「あ？」

黒崎が誰ともなく呟いた声は雨竜に拾われる。

「何だよ」

「演奏中、黒崎はそこに座っているにもかかわらず、やってる」とはまるでコンマス。」

余所見すんじゃないやねえっ！！！！

冬獅郎の声が思いだされる。

「僕から見ていても変だ。」

「ハッキリと言うなよ。……でも、全然気づいてなかった。」  
「いつもの癖なんじゃないかな。練習していくうちに、嫌でも慣れると思うよ。」

「そうか？」

「ああ。だって……」

雨竜は一護に近づく。顔が近い。

そして、まるで言い聞かせるかのように言った。

「このコンサートマスターは、僕だ。」

それだけ言って、冬獅郎と同じように出て行ってしまふ。

「コンマスに対して偏見みたいな持ってる奴がよく言うな」  
「仕方がないんじゃない？」

「うおっ、驚かすなよ。」

「驚くそつちが悪い。」

現れたのは既に楽器をケースに仕舞った、たつき。  
そして、その横には茶渡。

「……………石田雨竜は黒崎一護と嫌でも比べられる。少なくとも、  
本番は。」

「んな事……………」

「ある。自覚してないんだつたら仕方がないけど、アンタと石  
田は首席争い中って言っても良いと思う。」

「そうだったのか？」

「ム」

「本当に知らなかったの!？」

その事実をしつた一護よりも、たつきや茶渡が驚く。

「……………石田なりのプライドもあるだろうし、何より負けず嫌  
いだから余計でしょ。この2人を比べても仕方がないと思うけど  
ね。まあ、これが良い刺激になったら良いけど。」

「自らのプレッシャーに負けなきゃ良いが……………」

「うん。……………じゃあ、また明日ね。」

たつきと茶渡の間で結論が下される。そして、たつきは織姫と共  
に帰って行った。

「知らなかったのって俺だけ？」

「そうだな。……………個人練習に行くぞ。」

「お、おう。」

誰からもハッキリと告げられ、打ちのめされつつも、一護は楽器を



丁寧には舞い、皆と共に部屋を後にした。  
窓からは乾燥した風が行き来していた。

のばす、のばす、のばす、のばす。

まっすぐ、まっすぐ、まっすぐ、まっすぐ。

男はただひたすらにロングトーンをしている。

先ほどは、銀のコンダクターの元で『ルスランとリュドミラ』序曲』を合わせていた。

その時に見えた自分への課題を克服すべく、男はただひたすらに音を伸ばし続けている。

目を瞑り、無心になり、自分の音だけを聞いて……………。

「何してんだよッ！　ちゃんと前見てろっつっ！…！」

部屋の外から怒鳴り声が。

「ちゃんと前見て歩けよっ！　なんだ、その眼は！？」

気になり、部屋を出る。　階段の上で何かあったらしい。

野次馬が少し距離を置いてその様子を見ているため、ここからは何が起きているのかは分からない。

「俺が悪いとでも言いたいのかよっ！…！」

「……………うるさい」

1人怒鳴り散らしていた男の前に、一人。　それは、怒鳴られていた者ではなくて、近くの部屋から出て来た女。

「貴方は此処の関係者ではありませんね。　何のご用でしょうか、正面玄関はあちらです。　ご案内しましょうか。」

丁寧な言葉遣いだが、そこには苛立ちが見え隠れしている。

「ああ!?! 俺は此処の卒業生だつ!! 案内なんていらねえよ  
つ  
」

吐き捨てるように言った男は、あるうことが、女の肩を押した。

彼女の背には階段。 彼女の手には楽器。 この状況で、咄嗟に  
庇うのは自信の体ではなく楽器だろう。

「きゃつ  
」

押した男は、まだ苛立ちが収まらないのか、腕を組み見下ろしていた。 しかし、彼女が受け身を取れないと理解した途端、顔色を変えた。

「おいっ!?!?  
」

このまま落ちれば、背中を打ち、どうなるかわからない。  
女は目を瞑る。

そして、これから来るであろう痛みを予期して身を丸めた。

ドスっ

鈍い音。

音だけでは全くもって痛そうではないのだが、音にならなかった分のエネルギーが痛みになっているので、相当痛い。

「え……嘘。」

女に、それほどの痛みは襲ってこなかった。すぐに、今起きた事を把握する。もしかして、誰かが庇った？

「大丈夫か……?」

押した男が真っ青になって階段を下りて来た。先ほどまでの威勢は何処かに行ってしまったよう。

男の視線は女ではなく、その向こうであった。

女は恐る恐る、自分が下敷きにいる者を見る。 人。

「いつまで乗ってんだよ。 大丈夫か？」

「ああ！ ごめんなさい!!」

女は急いで腰を上げる。

どこかで聞いたことのある声に、女は無意識に安心する。

「ホルン、大丈夫だったのか、よ」

そう言うのは女にとって、思った通りの見知った男。

「え、ええ。」

女の体に、楽器には傷が無かったのに対して、女の服には血が付いている。

見知った男の血だった。

「嘘……。」

「そっか、なら、良か、った。」

「檜、佐木さん……!?!?!?!?」

女をかばった男は意識を失った。

「い、イヤあああああああああああああああつ！  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

女の頭の中は、窓の外にチラつく雪の様に真っ白になった。

白以外、ナニモミエナイ

噂だけが独り歩きする

独り歩きした噂はすぐに知れ渡り、訂正が困難になる

根拠のない噂など、流さなければ良いものを

気付いた誰かが訂正してやれば良いものを

うつすらと地に積もった雪。そこに一台の救急車が走ってきた。

すっかり白くなった地面。そこに赤い光を撒き散らしながら走ってきた。

一体何が起こったのか、それは大半の学生には分からない。

その時、学内放送がなる。

「学生はその場を動かさないで下さい。もう一度繰り返します。

学生は………」

この放送によって、余計に学生の興味がそそられる。

「どういうことだ？」

「誰か、知らない??」

皆、気になって仕方がないようだ。

「何があつたんだ？」

「僕に聞かれても知らないよ。」

一護は隣の部屋にいきなり入るや否や、問いかけた。にも拘わらず、一護の来ることが予測できていたのか、雨竜は涼しい顔で返事をする。

「……君はいつもそうやって無断で部屋に入ってくるね。それは癖かい？ 治した方がよいよ。」

「癖じゃねえよ。レッスンの部屋に先客が居たら、ちゃんと待ってる。」

「要するに、僕だから勝手に入ってるのかい？」

「うう。見知った相手なら入ってるか、も……？」

「はあ。そのうち、そんなことも関係なくやりだしそうだね。治し……」

「今の放送って何？ よく聞き取れなかったんだけど??？」

勢いよく入ってきたのは織姫。

「はあ〜。」

雨竜は思わず大きなため息をつく。

「えっ、何？ 私何か悪いことしちゃった？ ゴメンね、石田君。」

「いや、そういうことじゃないけど……。」

皆が揃って似た様な事をする。もう、雨竜に言葉はない。

「今の放送は、部屋を出るなって内容だったよ。何かあったら詳しい事は誰も知らないみたい。ほら、」

そう言つて、雨竜は2人に窓の外を示す。  
そこには慌てふためく事務員と、困惑する学生たち。

「事務の人間にも詳しい事は知らされていない。学生が知るこ  
とになるのは、もっと先になるんじゃないかな。」

「そうなんだ。なんか、色んな噂がメールで廻つて来てるか  
ら何かなつて……。」

「まあ、部屋を出ちゃいけねえつて事を今知つたから、俺はここ  
から出て行けねえな。」

「何が言いたい、黒崎。」

あからさまに眉間にしわを寄せた雨竜の顔は一切見ず、一護は持つ  
てきた譜面を広げる。

そして、ある一小節を指さして言った。

「ここつてどうしたらいいと思う？」

「自分で考えろっつっ!!!」

そう言つて、雨竜は一護を視界に入れない様に織姫を見る。

「井上さんはどうするの？ 今なら部屋に帰つても問題ないと思  
うけど？」

その声音には、黒崎を連れて出て行つてくれ、との意味合いが込め  
られていた。しかし……

「実は……私も石田君に聴きたいことがあつて……。」

にこにこ嬉しそうに言われてしまつては、邪険には扱えない。



「はあ……。今日だけだからね。」

「わあ、ありがとう!」

「サンキューな、石田。」

自分の練習はひとまず休憩。たまには人の演奏を間近で聴くのも良いだろう。

そう考えて、雨竜は2人への簡易レッスン開始。

すると織姫はおもむろに携帯を取り出し2人に見せた。

「あのさあ、このメールがね。今来たんだけど。さっきのことが色々書いてあるんだ……。なんか、事故があったみたいだね。」

最後に、友達5人にすぐに回してって書いてあるんだけど……」

「って、おい。井上!!」

「井上さん! それはチェーンメールだから、回しちゃダメだよ

!」

「えっ! そうなの? もう回しちゃったよ!」

結局、あの日の事について詳しい事が学生に知らされることは無かった。

それから数日が経つ。

皆、コンテストへの練習に忙しい。なので、演奏会の練習で会う事は勿論、校内に居ても会う事がなくなっていた。会うと云えば、何時ものメンバー。変わり映えが無い。

「はあ………」

窓際から聴こえる小さなため息。

それを心配する赤毛。本人には聴こえない様に、隣に座っているバリトンサクソフォン奏者に声をかける。

「最近、ため息ばかりじゃないですか？」

「演奏会についても進展がないけん。それに就職も決まったらしい。」

「って、目標を見失ったって事っすか？」

うん、と射場は頷く。

「それ以外に何かある？」

突然、碎蜂が話に入ってきたので驚く一同。

「聴いてたんすか？」

「この狭い部屋で聞こえん方がおかしい。」

それもそうだな、と恋次が納得していると。部屋の外が少しだけ騒がしい。何やら言い争っているようだ。気になって恋次が扉を開けようと、席を立ちあがった。ドアノブに手をかけようとした、その時。恋次の手が掴んだのは空だった。

バン

突然開けられた練習室の扉。

そこから飛び込んできたのは、恋次と射場よりも随分と小柄。でも、碎蜂より少し背の高い女性。その姿を見た碎蜂の顔が驚きと喜びが入り混じったものになる。

「久しいのお！」

「っ!？」

女性は、入ってきた勢いのままに楽器を手にしている碎蜂に抱きつく。抱きつかれた碎蜂はというと、大切な楽器とその女性のどちらも無下にすることは出来ず、尻もちをついてしまった。

「……どうされたのですか」

さきほど一瞬だけ見せた晴れ晴れしい顔つきはどこへやったのか、今の碎蜂の表情は氷のように冷たい。女性を振り払い、碎蜂の口が開かれる。話す声が、いつもより低い。

「何をしに再びこの学校に足を踏み入れた。」

「……碎蜂。」

「貴様が望んで出て行ったのだろうか？ 出て行け」

忌々しそうに睨みつけられてた女性は驚愕の表情を隠し切れていない。

「四楓院夜一……っ！」

部屋の空気が重く、冷え切っている。

結局あの後、部屋を出て行かざるを得なかった。今回の再会、簡単に考え過ぎていたのだ。

自分が勝手に出て行った事に対して彼女がどう思ったかなど、考えた事が無かった。いや、それは違う。考えた事はあったが、彼女を介して自分のした事を擁護してただけだ。

自分がした事を正当化させようと、何かあった時に自分の帰る場所を残そうと。勝手に思っていただけ、我が儘にも程がある。

この道は、初めて自分の意思で自分から選んだくせに

周りの者の所為にしてしまおうとしている自分。それが恐ろしく醜い。

構わないと笑ってくれる彼に対しても失礼だ。

甘やかされている、そして、それに甘えてしまっている自分がいる。結局、親にレールを敷いてもらわないと何も出来はしないのか。自分の力だけでは何も出来ないのか。

月が冷たく嘲笑っている、ように見える。

「どうしたんっすか、夜一さん？」

「・・・喜助、か」

もう、すっかり日が暮れてしまっている。

ここは喜助の家。 四楓院の家に戻る気などなれなかったのだ。

「碎蜂に嫌われてしもおた。」

「それで随分感傷的になっちゃってるんすね？」

「……。」

そんな事、聴かずとも分かっているくせに。 本人に言わせようとする男が浦原喜助だ。

相変わらず、何年たっても何処に居ても変わらない男。

「久しぶり会って、敬愛する気持ちと何とも言えない気持ちが碎蜂さんの中で混沌としちゃってるだけっすよ。 アタシが見た限り、彼女は夜一さんの知る彼女と変わりないように思いましたがねえ……。」

「喜助にはそう見えたか。 じゃが、僕には違う。 碎蜂はもう、別の所へ行ってしまっている。 僕の事など見えてはおらぬ。」

「なら、どうしてそこまでムキになったんだと思ってるんすか」

「……。」

「変わってないから、でしょ？」

僕に背を向け、こう続けた。

「…生憎、四楓院とは違って此処は門限なんてものはないんで。

じゃあ、おやすみなさい。」

そして、去って行った。

立ち上がる。 泣きごとを言っただけで暇ではない。

「喜助には、また甘えてしもうた」

雪降り止まぬ白い夜道に足跡が。 それをつけたのは、黒いウサギ。  
寂しがりやの黒兎。

夜遅くの突然現れた来訪者。 家族はそれが誰であるかは教えず、  
部屋へ通してきた。

「すまんのぉ」

背を向けていたのに声で誰であるのかが分かった。  
四楓院夜一。

「こんなに時間に、のこのこと……っ!!」

そう言いながら振り返った。 見えるのはあの見慣れた眩しい笑み  
だと思っていた。  
しかし、見えたのは

泣き顔、のように見えた

それだけで心がギユウギユウに締め付けられたなんてことは、本人  
にはおるか、誰にも言えまい

いよいよ明日。勝負の時。

他の皆はそれぞれの開催国へと旅立ってしまった。  
ヴァイオリン部門はと云うと、幸運にも母国開催。開催国はオリ  
ンピックの様に（完全にそうとは言えないのだが）各国を点々と回  
しているのだ。

「あれ？石田、何で此処に居んだ？」

「・・・君って奴は」

そう言つて雨竜は深いため息をつく。

「本当に自分の出る大会の事を調べない奴だな。そんなので参  
加するな。周りに対して失礼だっ」

「そこまで言わなくなつていいだろう。・・・で、何で居んだ  
よ」

一護をキッと睨んで話す。

「君が出るのと僕が出るのは同じ会場で行われる。そして決勝

は・・・」

「決勝は？」

「言わない。」

「はあ？ 教えるつて」

「自分で調べる。それか、決勝まで行けば分かるだろう。ま、

決勝まで良ければいいけれどね」

「どつという意味だよ」



一護が余りに大声で言うものだから、周囲の注目を集めてしまっている。  
それが耐えれなく、雨竜は一護を置いて会場へと足を踏み入れ、そそくさと消えてしまった。

「なんだってんだよ。」

「今のは、黒崎サンが悪いっすね。」

「なっ！！」

「誰から見ても、始めから話を聞いていなくても」

「・・・あ、んたは」

一護は驚きを隠せていない。

「お久しぶりっす、黒崎サン。少しは上達しましたか？」

「どの面下げて現れてんだっ！」

「やだなあ、黒崎サンったら。久しぶりにアタシに会えてそんなに嬉しいんすか？」

「違ーっつ」

「相変わらず、お元気そうで」

一護より背の高い。帽子を深くかぶったその男を誰と間違えるだろうか、いや、間違えることは無い。

「浦原喜助・・・。」

「呼び捨ては良くないっすよ。一体、誰のお陰で音楽の才能に目覚められたと思っつてんすか」

「ルキア」

「.....。間違っではない」

「アンタだっつて言っつて欲しかったんだろ？ 相変わらず面倒くさ

いな」

「面倒とはどういうことですか。アタシからすれば、コンテストのことを碌に知りもせず参加しようって言う方がよっぽどではないかと」

「……………」

「石田さんが拗ねた理由を教えてあげたって事だけでも感謝してほしいですよ。……まあ、前振りはさておき。」

「前振り長くね？」

一護の言葉をあっさりとスルーし、喜助は言う。

「ここでの決勝はなんとつ、ヴァイオリンコンチエルト！」

「はあ！？ いきなり意味分からねえ事言ってるんだ」

「人の話は最後まで聴いた方が良いつすよ。第一、この事は参加者なら皆知っていて当然なんで。」

そう言われてしまつては一護は反論できない。

下調べも全くしていないのだ。

「ソリストは、石田さんが出る方の決勝進出者つすよ。で、そ

れのコンマスは」

「それも決勝進出者……？」

「ええ。」

一護の目の色が変わった。

始めからちゃんと調べておけばいいのにと、それを見た喜助は思つてしまう。

「でも、このやり方は次から見直されることになつたんすよ。

だつて、どちらかの技量で優勝することも出来ないこともあり得ま

すから。」

決勝でランダムで決められたソリストとコンマスが組む。そして、良かった方の演奏をした方が優勝を勝ち得る。それで、毎回涙を流す者が少なくは無い。

「俺……。」

「まあ、運よく両者が決勝まで進出したとして。一緒に演奏出来るわけではありませんから?」

「ああ。でも可能性は生まれんדר? やるしかねえ!」

「頑張ってください。では、アタシはこれで。」

それだけ言って、消える浦原喜助。

「何しに来たんだ?」

周りを見渡すと、もうすでに人影が少なくなってきた。長い間話していたようだ。

「やべっ、遅刻しちまう」

一護は走って会場受付まで急いだ。

「何か連絡はあったのか？」

「黒崎が訳のわからない連絡を入れて来ただけだ。残りの奴らは順調、問題ねえんだろうよ。」

部屋には珍しい組み合わせの2人。 碎蜂と冬獅郎だ。

「まあ、有ろうことか、今日はどのコンテストも一斉に予選だ。メンバーもほとんどいねえ。結果が残る様に頑張つて来てもらうしかねえな。」

本来なら、この部屋にはもっと多くのメンバーが揃っているはずだった。

しかし、皆が各国へと散ってしまったて残っている者が少ない。今頃、予選がもう始まっているくらい時間だろう。

よって本日の練習は各自、適当に。 たまたま、この空間に2人が居る。 それだけだ。

「・・・碎蜂。 先日のあの話、詳しい事知ってるか？」

「あの話？」

「話、いや、この間珍しく学内放送があっただろ？」

「ああ」

滅多に流れる事のない学内放送。

学生への連絡は主に掲示板で行われる。 聴いているかどうかかわからない放送での連絡は、緊急事態でないと流れない。

「何も聞いていない。 どうやら、事故があつたらしいが…」

「卒業生が現役生を階段から突き落としたりらしい。」

「待て、日番谷。 なぜそれを知っている」

「その突き落とされた奴が知ってる奴だからだよ。 勿論、本来

ならこの空間に居なけりゃならねえ奴らも。」

「……。」

根拠のない噂にも、誰が誰に何をしたかなどと云う様な内容のはなかつた。

学校側が相当な圧力をかけて隠ぺいしたのか。 それとも、言うに云えない様な惨事だったのか。

「詳しい事は俺も知らねえが、その怪我をしたのは檜佐木らしい。ほら、最近顔見せてねえだろ」

「それはそうだが、伊勢も来ていないぞ。」

「それがわかんねえんだよ……。 救急車で送られたのも檜佐木、1人だけらしい。」

「伊勢は何ともない？」

「ああ。 でも連絡がつかねえ。 誰か伊勢と仲の良い奴を知ら

ねえか？」

「伊勢、か……。」

碎蜂の頭の中で色々な顔が浮かび上がっては消える。

誰だろうか。

「あ……。」

「いるのか？」

思いついた。 しかし、それにはある人物を介さないと碎蜂には連絡を取る術がない。

「日番谷がどうしてもと云うのであれば、仕方がなく」  
「頼むっ」

このとおりだ、と頭を下げて来たものだから碎蜂に逃げ道は残されてはいなかった。

「連絡を入れて来たのが尊敬する先輩であれば伊勢も何か返答するだろう。近いうちに何とかしよう。」

「ありがとう」

「いや………」

そう言つて、碎蜂はポケットから携帯電話を取り出し、俄かに震える指先で電話をかける。  
そして、部屋から出た。

「……もしもし？」

数コールもしない内に電話に出た相手。

「碎蜂？」

「あ、夜一様。」

思わず昔の様に返答してしまった。彼女が去つてからのあの決意は、彼女のあの顔を見て砕け散ってしまったのだ。

「どうした！ 碎蜂から連絡を入れてくるなど初めてではないか  
！！」

「あの、協力していただきたいことが……。」

その声音からニコニコと嬉しそうなのが解ってしまうだけに、少  
要件を言いづらい。

『なんじゃ？ ああ、今どこにいる、そっちに行こう。』

『いえ、私が参ります。今、A棟にいますので…。』

『A棟じゃな。すぐに見つけ出す。動く出ないぞ。』

しまった、と思った時には既に遅く。

電話は切られ、聴こえてくるのは冷たい機械音のみ。

「碎蜂！」

「夜一様！！！！」

「要件は何じゃ？」

急いできたのであろう。いつも後頭部で括られている黒髪は少し  
乱雑にまとめられている。

であるにも関わらず、息は一切切れていない。

「あの、伊勢を覚えていらっしやいますか？」

いきなり本題へと移る。マゴマゴしている時間は無駄なだけだ。

「覚えておる。矢胴丸にやたらと懐いておった奴じゃろ？ 懐  
かしいのお。」

「矢胴丸先輩に伊勢と連絡を取っていただきたいのですが。」

「それは・・・？」

「部屋の中に日番谷が居ますので、彼から詳しい事を聴いて下さ  
い。」

「わかった。碎蜂が意味のない様なことを言うような者ではな  
いのは知っております。わかった、伝えよう。」

「ありがとうございますっ！」

「今日、言ってみる。明日まで待て。」

「わかりました」

夜一は去って行った。



「予選が終わったばかりで召集って何すんだ？」

「何とぼけた事を言っているんだ。演奏会までのんびりしている時間はもうない。」

「そっか。」

何も考えずにただ、目の前の課題に取り組んでいる様なだけの一護に兩竜のため息は今日も絶えない。

そんな2人が部屋に入ると、苦々しい表情の日番谷が既に居た。

「遅かったかな？」

「いや、俺が速いだけだ」

兩竜の問いに応えはするものの、冬獅郎の声音は何時もの数倍恐い。

「やっぱり揃わねえな…。誰か居ねえ奴には後で俺が連絡を入れる。とりあえず座れ。」

それもそのはず、この場に居るのはヴァイオリンパートとコンテス  
トに参加していない者だけだ。

あとは国外へと出て行ってしまっているの、当分は帰って来ない。

「とりあえず話しておく。この話をコンテスト真っ最中のこの時期にするのはどうかとも思ったが、この話を聞いたくらいで演奏に差し支えるようなら決勝には行けねえだろうしな。話すことにした。」

眉間にしわを寄せ、先ほどの声音のまま話すものだから、初めて彼と会話する者なら畏怖してしまうだろう。

「先日、学内で事故があった事はもう噂とかで知っていると思う。その被害者が、うちのメンバーの一人だ。」

「それって？」

「急かすな、黒崎。今から云う。……トロンボーン  
の檜佐木だ。」

騒いだりはしない。

実感がないのだろうか。

「階段から突き落とされた。詳しい事は俺も知らねえ。でも・

・

冬獅郎が見た先、そこにはコンテストに出ていて国外に居るはずの人物が。

「私が話します。」

伊勢七緒だった。

一体、どれくらい時間が経ったのだろうか。

伊勢が淡々と話している間。誰も言葉を発さず。ただ聴いているだけだった。

疑問は次々と生まれ、消化されていく。

それだけ七緒が丁寧に説明をしているからだ。だが、肝心な事を言わず、そのまま出て行ってしまった。

「なあ、冬獅郎。」

「日番谷先輩、だ。何だ、黒崎。」

「今、檜佐木さんってどうなの？ 演奏会と一緒に出れんのかよ。」

「……本人の体は問題ねえらしい。そこまでしか俺からは言えねえ。コンテストの最中に集まってもらって悪かった。今日は解散だ。」

それだけ言って冬獅郎は部屋をでた。其処に居たのは七緒。うずくまって、廊下の隅に座り込んでいる。そっと近寄って声をかける。

「伊勢」

「私が、私の所為で……っ!!!!」

「伊勢。ホルンの腕、鈍ってねえだろうな」

「？」

やっと、七緒は冬獅郎を見た。

「音楽は魔法だ、って俺の先生はよく言ってた。人を幸せにする。……それが本当なら、伊勢が魔法をかけてやればいい。」

冬獅郎は階段を下りて行ってしまった。

ぼんやりと、七緒はそれを見送りながらも、言われた言葉の意味を咀嚼する。

「私が、魔法を……？ 案外、日番谷先輩もメルヘンな……。」

あの言葉は以前に伊勢も言われた。  
おそらく、2人と同一人物から聴いたものだろう。

「前を向けっことね」

七緒は立ち上がり、砂埃を払って練習室へと足をやる。  
予選は不安定な精神の中、演奏しきった。  
あとは、待つだけ。 備えるだけ。

さあ

涙を拭いて、立ち上がれ

泣いている暇など

今はない

泣いている顔など

君には似合わない

予選日から数日が経った。

そして、今日が予選の結果発表の予定だったが、何故だか発表が遅れている。

「なんでだろうな」

「知らねえ」

そんな会話が何処となく聞こえてくる。

しかも、学校の至る所で。

それは、皆が結果に注目し、期待している何よりの証拠。

「午前10時に発表予定だったのが遅れているくらいでガタガタ云う必要はないよ」

「そうだ。　てめえも石田くらい余裕をもって結果を待てねえのかよ。」

「んなこと言われてもよお・・・」

「そんなにダメな気しかしねえんだったら、もし、決勝まで行けても一番は絶対に無理だ。　諦めろ、黒崎。　目障りだ。」

「冬獅郎って、やっぱりキツイ事をハッキリ言っよな。　酷え」

「優しいさだ。　有難く受け取れ」

一護の言いように冬獅郎は適当にあしらう。

その横で、雨竜は携帯電話にでた。

「はい。・・・自信がないのに出たりはしない。・・・

・・・これは僕の意志だ。・・・」

それに気がついた2人は声を小さくする。

「では」

静かに電話は切られた。

険しかった表情は一瞬だけで、2人の方を見た時にはいつもの落ち付いた顔だった。

「黒崎、もう結果が出てるみたいだよ。」

「げ・・・知りたいような知りたくないような。でも、俺は絶対」

言葉は此処で切られたが、言いたい事はよく分かった。

一護は走って、何処かへと消えて行った。  
ソレを確認して、雨竜は冬獅郎に向き合う。

「まあ、当然の結果だよ。」

滅多に感情を大きく顔に出さない彼が、にこりと笑った。それは男の冬獅郎が見ても見とれる様な笑みで。

「もうしばらく演奏会の方に手が回らないのが、もどかしいけれど。」

「いや、コンマスが良い結果を残せば演奏会にくる観客が増える。良い宣伝をしてきてくれ。」

そんなことを少し笑いながら冬獅郎は言う。

「責任重大だな...。自分の為に参加してたのが、一瞬にして違

うものになったよ」

「おーいつ」

「・・・もう戻ってきやがった」

さつき消えて行った一護がもう現れた。

おそらく結果を見て来たのだろう。そして、その結果は聞かずとも分かる。

嬉しい事に関しては本当に感情を表に出す男だ。

「石田はどうだったんだ？」

「おい黒崎、そういうことは普通、自分から言つものじゃないのか？」

「俺は余裕。参加人数が少なかったから二次予選もなしで決勝」

「僕もだよ。次の舞台は決勝だ。」

2人とも決勝の舞台へと駒を進めた。

しかも本国開催。冬獅郎は、自分たちの演奏会のヴァイオリントップである2人が出るコンテストを、ぜひとも見に行かなければ。

「それはいつだ？」

「二週間後・・・だったと」

「あつてるよ、二週間後だ。」

「そうか。詳しい事が解るのは何時だ？」

「今日の夕方5時。その時に決勝での曲目とかが連絡されることになってる。」

うんうん、と雨竜の説明に一護は頷いている。

「楽しみだな。」

「おう、楽しみにしてくれ」

「当然だけど、全力を尽くすよ」

頼もしい一護と雨竜の返事に冬獅郎は満足し、他のメンバーの結果を待つ。

只今の時刻、午前11時24分。



一護が出た『新人・国際ヴァイオリンコンテスト』と雨竜の出た『新人・国際音楽コンクール、ヴァイオリン部門』の本戦決勝は同じ時間、同じホールで行われる。

つまり、早ければその時、共にコンチエルトを演奏出来ると云う事。そこで優勝すれば、2人は一番のソリストとコンマスになれる。

「って、俺知らなかったんだ。・・・浦原さんに教えてもらうまで。」

「……自分が出場するコンテストのことくらい自分で事前に調べておけ、黒崎。」

見事に2人とも決勝進出。そして運よく、同じオーケストラだということが昨日の夕方にわかった。

曲はチャイコフスキー唯一のヴァイオリンコンチエルト。

「難曲だな……。」

「なんだ？ 石田の苦手なタイプか？」

「・・・ちがう。この曲に対する思いが深すぎて、危険だって意味だよ。よりによって……。」

「ま、どうにかなるだろ。俺と一緒によかったな。」

不安そうな雨竜を見てニツと笑う一護。それにつられて雨竜も笑う、が少しかたい。

「そうかもしれない。まあ、見ず知らずのコンマスとだったら、当日は行かなかったかもしれない。」

「石田と俺となら無敵だろつ。ま、確かに簡単な曲じゃねえよな…。」

当時の名演奏家に演奏不可能と言われ、今日演奏こんにちされているのは専ら手を加えられたもの。

しかし、今回2人が挑むのはオリジナル。

「不可能を可能にする、か？」

「そんな台詞せじふ、君しか言わないよ。」

「じゃあ、俺が言うしかねえだろ。」

一護がニツと笑う。それにつられて雨竜も笑う、本当に笑っている。

「練習あるのみ。ま、大丈夫だ。あとはやるしかねえ。」

2人は楽器を片手に楽譜を広げる。

「君に言われなくても。それは当然だよ。狙うのは上だけだ。」

下は見ない。

全ては結果を手にするために、聴き手を感動させるために。

焦りだけが心の中で雪のように静かに積もっていく

白く白い雪ならば、皆が手に取り笑むだろう

白く黒い雪ならば、誰かがそれを見るだろう

黒く白い雪ならば、人はそれから目を背けるだろう

黒く黒い雪ならば、それを降り積もらせた本人さえも目を背ける

君の心に降る雪は

はたして何色、誰が手にする

予選通過。

演奏会メンバーの全員がコンテストに参加したわけでも、決勝へと駒を進めた訳でもない。

予選が通過できなかった者は早々にこちらに帰ってき、練習を再開している。

「皆戻って来て・・・ちょっと複雑だね。演奏会の事を考えたら嬉しいけど……」

織姫が冬獅郎に言う。

「気にする必要ない、気を使う必要もない。これが現実だ。」

悲観してる奴は放っておけ、とでも云うかのようにそう言った彼は視線をスコアへと落とす。

もう話す事はないだろうと言われたようで、織姫はこの場から立ち去る。

来たのは部屋の外。学院の敷地の外。

織姫は色々な所へ出歩いては色々な人と話している。演奏会の為に。

そう言う宣伝をしているかのように見えるが、本当の狙いは違う。

「やっぱり難しいよ……」

織姫は演奏会で歌う。

その詩は自分で考えろと言われたのだ。

この間、伴奏を聞いた。メロディの流れも掴んだ。自分の中で曲の色は見えた。

しかし、それを言葉にするのが難しい。色々な楽器の奏者に話を聞いたり、外に出て自然に溶け込んでみたり。

今まで、織姫が思いつく限りのことを行ってきたが、いまいちピンと来ないのだ。

「色はピンク・・・桃色じゃなくて、桜みたいに淡い色。」

これが彼女が曲から感じ取った色。

此処で同輩の言葉を思い出す。

“連想ゲームみたいにつなげていけば良いじゃん”

「連想ゲーム、か。桜色 入学式・・・卒業式？ 出会い、別恋、失恋・・・。なんか暗くなっちゃうかな...。」

とりあえず出て来た言葉をメモし、単語をひたすら出していく。

「一目ぼれ、片思い・・・す、き。キヤー、恥ずかしいよ!」

思わず叫んでしまった。

慌てて周りを見渡す織姫。

場所が場所良かった。ここは学院の前の敷地。

畑のど真ん中。誰も聞いてなどいない。

ふう、と息をつく。

思いつかないものは仕方がない。兎にも角にも進むしか道は無いのだから。

織姫は深呼吸し、背筋を伸ばす。

そして、学院へと戻って行った。

聴こえて来たヴァイオリンの音色。

それは、織姫にとってとても聞き覚えのあるもので。無意識のうちにもそちらへと足を進める。

ある部屋。

中から二つの音色が。

そっと中を覗く。中に居たのは織姫の思った通りの人。

「そこ、リズムが違う。」

「ああ？ あ、サンキュー。」

譜面とにらめっこしている。

この2人は見事予選を通過した。そして、楽しみな事に2人は同じ舞台にファイナリストとして立つ。

すると、雨竜が織姫に気付いた。

「どうしたの、井上さん。」

「井上？」

一護は扉を振りかえる。

「音が聴こえたからちょっと・・・」

ごめんね、と笑う姿に誰が怒ることなどできようか。

「じゃあ、ちょっと聞いていってよ。黒崎がどれだけ練習をさ

ぼったか。」

「え、黒崎くん。次は決勝だよね？」

「別にサボってたわけじゃねーよ。ただ、」

「言い訳は良いから。始めようよ。」

コンマスとソリストによる公開リハーサル（?）。  
織姫はそこにあった椅子にちょこんと座り、2人の音色に聞き入った。

もう、すっかり見慣れてしまった白い天井。

こうならざるを得なかった原因も、こうなる前の事も  
今まで何をしてきたのか、これから何をしたかったのか  
今すべきことは何なのか、そもそも何が出来るのか

そして、自分の名すら

覚えていない。

「おはようございます、檜佐木さん」

毎朝のように此処へ来る、伊勢七緒と名乗った彼女。  
知り合いであったようなのだが、一向に思い出す気配はない。来  
るたびに、その整った顔が歪められているのを見るのは辛いものだ。



「おはようございます、伊勢さん」

しかし、今日は違った。

彼女は淡く微笑みながら言う。

「外へ行きませんか？」

「外？」

外出禁止と云う訳ではないのだが、行くところもないので何処にも出かけていなかった。

「はい。 私たちが学んでいる学校まで行きましょう。」

嬉しそうに言う彼女の顔を見て、誰が断れただろうか。

頷いたのを確認すると、彼女は支度をはじめた。

周りには田んぼと畑以外に何も無い。

無駄に大きい門をくぐり、敷地に足を踏み入れる。

木々が整然と植えられ、その足元をプランターの花が色を添える。

風の音しか聞えてこなさそうな、ただただ広いこの空間に何やら聞こえてくる。

「……は？」

「ここは私たちが通う音楽学校。今日は授業の無い日なので、聞こえてくる音は全て自主練習のですね……」

彼女は頷きながらそう言っ、先をツカツカと歩いていく。どこを歩いていても誰ともすれ違わない。それはまるで、今此処に居るのは自分だけだと錯覚させる。

「この中へ入りましょう」

言われるがままについて行った先は、ある部屋。その扉は普通の扉より重そうだ。

「……では」

それだけ言っ、彼女は部屋から出た。意図が解らず、呆然とするしかないが、目の前にあるモノに目が留まる。

気が付くと、それに触れていた。

「……」

これに覚えが無い。

ここは音楽大学。そしてその学生。

そうなれば、これは楽器だろう。そっと開けてみる。

あったのは、金色のメッキ（こみじき）が施された真鍮（まね）からなる異様な形。二つのパーツからなり、くつつけるようだ。

少々重量のあるそれを手に取り、くっつけてみる。自分の気の向くままに。

すると、それは形を成した。

後はシルバーのをはめて、

「これを知ってる……？」

完成した、楽器の名はトロンボーン。

日常生活に支障がでるようなことは覚えていた。

忘れたのは、自分について。楽器もそのひとつだった。

壊れ物を扱うかのように、そっとマウスピースを口にあてがう。

C

何とも表現しがたい音。

空を切る様でも無く、かといって包み込んでくれるわけでもない。

会えて表現するならば、それはまるで、それら正反対を混ぜ合わせる乳化剤。

そして、机の上に置かれているモノを見る。

紙だ。

白の紙に黒のインクで五本一組の線が真っ直ぐと引かれている。

そして、その線の間や線に突き刺さるような形で黒い丸が踊っている。

これは譜面だった。

自然と体が動くままに任せ、楽器を構える。曲のテンポと同じ

速さで吸った息を同じ速さで楽器に吹き込む。

亡き王女の為の帕ヴァーヌ

「この曲は……」

部屋の外で中をずっと伺っていた。何かあれば入り込むつもりだった。

しかし、そのようなことをしなければならぬ事はない様だ。自然と口角が上がる。

「たとえ自分を忘れても、大切な音楽のことは覚えていて、か・  
」

此処へ連れてくるかどうかは悩んだ。

でも、此処には彼を知る人が多い。そして、彼の思い出が詰まっている。

あのような何も無い、ただ白だけの部屋に籠りつきりでは思いだせるものも無いだろう。

「たしか、言ってたよね。もし、自分を忘れる様な事があっても音楽だけは忘れないって、さ……皮肉だよ、本当に。」

もし、俺が自分の事を忘れる様な事があっても、いきなりどうしたの？

もし、の話だよ。

わかった、一応聞いてあげる。

もし、俺が記憶喪失になっても音楽だけは忘れねえと思う。

・・・

だから、七緒ちゃんが思い出させてくれよな。俺が誰なのかを。

・・・呼び出しておいて、話つてこの事？

話そうと思ったけど、今はやっぱり無理だな。

何よ。

それくらい、俺には音楽しかないってことだ、誇れるような事つて。だから、俺が自他共に認める様な演奏者になったら言うから、絶対に。

このあと、言われた事は忘れられない。そして、言ってくれる日は来るのだろうか。

「早くしないと、私、他に人の所へ行っちゃうよ。」

心のどこかで言ってもらうのを待っている。

だから今、こうして必死になって足掻いているんだ。彼は思い出したくもないかもしれないと云うのに。

全力で、足掻いているんだ。

永久とわに俺が傍がに居にてやる

空気が弛んでいる。

コンテストに参加した奴らが思っていたよりも決勝まで駒を進められなかった。

たしかに、毎年多くの学生が参加し、そのうちの大半が決勝の舞台を見ずに卒業する。

どれだけ真剣に取り組んでいようとも、だ。

しかし、定期演奏会に選ばれるメンバーは、学長の好みではあるが、学院でも腕利き。

例年であれば、このメンバーはコンテストに出れば決勝進出。決勝へ行っていない様なそれ以外の者はコンテストに不参加。

にもかかわらず、今年は惨敗と言っても良いだろう。

今年、学院全体の傾向らしい。

目標を失った奴らの気が緩んでいる。それにつられる様にして全体が怠けてきているのだ、目標が明確であるのに。

これは正直、困った事態だ。

ほとんどが演奏会に目を向けていない。

「どうするべきか・・・」

思わず思っていたことが口に出た。しかし、それを聞いているような人物はいない。

本日は休日。

一か月ほど前であれば練習する部屋がなく至る所で楽器を持ってウロウロしている学生の姿が見られたのだが、今では使われている部

屋を探すほうが大変だ。

G . . .

ずっと引き籠るように部屋にいたのでは、気が滅入る。そう思っ  
て部屋から出て来た。

そして聴こえる旋律。

この半年ですっかり聞きなれたメロディライン。  
演奏会前半の華。

その色を添えるのはホルン、伊勢七緒。

彼女はコンテストに参加していることもあって、最近、ますます音  
色に艶が出てきていた。

「伊勢？」

噂をすれば・・・のような状況に驚きつつも、壁にもたれて目を瞑  
る彼女に近づいていく。

「伊勢、何して・・・？」

部屋の中から曲が聴こえてきていたのだ。

「コンテストはどうした？」

その声をかけると、やっとこちらを向く。

こちらに気が付いていなかったらしく、すこし驚いた様子だ。

「日番谷先輩・・・。コンテストは決勝まで進みましたよ。明日、  
あす  
出発します。」

「何のために帰って来てたんだ？ 移動時間も練習にあてなけれ



ばなりません、って去年の今頃誰かさんに叫んでたのは誰だよ。」  
冬獅郎の言葉に懐かしそうに目を細め、今度は無理に口角を上げる。  
その笑みは見ている者も締め付ける。

「彼・・・檜佐木修兵を放っておくことができなかつたんですよ。今日、やっと連れて来たんです。」

「元氣そうだな。音色もかわってねえ、むしろ良くなってるみたいだ。」

嬉しそうに語る冬獅郎に対して、七緒は首を横に振る。

「日常生活に支障は全くありません。ですが、誰のことも覚えていなかつたんですよ。楽器の事すら始めは解らなかつたみたいで。十数分は見つめたままでしたから・・・。」

「・・・。」

中から聞こえてくるのは、そんなことを一切感じさせないような演奏。

相棒とでも云うべき楽器の事は思い出せている。

しかし、七緒の表情は決して明るいとは言えない。

「おそらく、今、皆と会ってもわからないでしょうね。」

これが理由らしい。

記憶を取り戻せていない修兵に、思い出してほしいのだろう。些細なことでも、くだらないことでも。何でも良いから。

「・・・私は」

「伊勢さん？」

「っ！」

七緒が何か語ろうとしたところに、中から修兵が現れた。

「どうされましたか？」

平静を必死に取り繕っているのが冬獅郎からはバレバレなのだが、修兵には伝わらない。

「あ、こちらは日番谷冬獅郎先輩ですよ。　　ここの指揮科で、次の演奏会のコンダクター……。」

「元気そうじゃねえか。」

修兵が冬獅郎を捕えたのを確認すると、冬獅郎は鞆からファイルを取り出し突き出す。

「練習しとけ。」

「……わかりました。」

怪訝そうな顔を一切せず、修兵はそれを受け取り中身を確認する。

「これって……。」

中身に対し不審に思った修兵は冬獅郎に問おうとするが、すでに姿は無かった。

「どうしました？」

「いえ、なんでも……それより、いつまで此処に居ますか？」

ファイルの中には、君と過ごしたカケラが一つ

残りのカケラは

君の中に

はやく、見つけて

あなことが泣いちゃう

「この音色って・・・」

人の少ない今日、練習している音は嫌でも良く聴こえてくる。

それが、緩み切っている空間に矢が放たれたかのようなならば。 . .

・敬愛する先輩の音ならば尚更。

ちらりと横を見る。

音楽史の勉強に集中していて、まだ気付いていないようだ。

皆の勉強を妨げない様、静かに立ち上がり部屋を出る。そして、音に誘われ歩いた。

「あ、日番谷先輩。」

向かっている途中で出くわしたのは、我らがコンダクター・日番谷冬獅郎先輩。

「吉良か」

あいさつ代わりに手を上げ、日番谷先輩はこちらにくる。

「先輩、この音色って・・・。」

「まだ本調子じゃねえみただけだな...。」

僕の横に立ち、日番谷先輩は奥を見た。

その視線はある練習室とその前に立つ伊勢先輩を捕えている。

「これに気付いたのは？」

質問をするにとしては言葉足らずだが、それでも意味はわかった。

「僕だけです。　だいたい、阿散井くん達が知ったら今頃、騒いで煩い所ですよ。」

「ならちよつど良い。　皆にはまだ言っつんじゃねえ。」

僕の目を真つ直ぐと見て言った。

何か訳があるのだろうか。

でも、その訳を聞くことが出来ない。　させてくれない、その眼差し。

「わかりました。　ひとつだけ、いいですか」

返事がないと云う事は、駄目ということではない。

これだけは知っておきたい。

1人の後輩として、そして、同じオーケストラの一員として。

「次の演奏会、全員揃いますよね・・・？」

この質問は予想外だったのだろうか。

日番谷先輩は目を見開いてこちらを見た。

沈黙。

そのバックには、亡き王女の為の帕ヴァーヌが奏でられている。

トロンボーンの音色だけが空間を媒介として鼓膜を震わせる。　そ

れ以外の波はこの場には存在していないかのように。

沈黙。

それは、長い長いように感じられた。

時間ではそれほど経過していないにもかかわらず。　それだけ、答えを待つことに緊張でもしていたのだろうか。

やっと、日番谷先輩が口を開いた。

「揃わねえと、演奏出来ねえだろうか。」

当たり前のことを聞くんじゃないやねえ、そう言われてるようだった。

「そうですね。皆で演奏会を作ってきたんですから。」

ありがとうございますと言いつつ、と言いつつ頭を下げた。

そして、赤髪の友が未だ勉強しているであろう部屋へと戻る。

まだ、王女の曲は響いている。

吉良の問いに即答できなかった。

「次の演奏会、全員揃いますよね・・・？」

「揃わねえと、演奏出来ねえだろうが。」

どうして、あのような陳腐な答えを出すのに時間がかかってしまったのだろう。

「そうですね。皆で演奏会を作ってきたんですから。」

吉良に言われて、一瞬不安が過つたのかもしれない。

このまま、檜佐木が復活してこなければどうしようか、と。戻ってくるかと信じている。でも、その根拠は何処から？

学院内のこの静寂と、いつも通りに振舞う伊勢の姿に、何も知らず淡々と話しかけてきた吉良。

どれも、なぜだか俺を不安にさせる要素ばかり。

根拠など無い。

所詮、ただの願望。

戻って来てほしい。これが本音。

だが、俺がしっかりしなければ。

思っていた以上に儂い伊勢が、もし精神を崩壊させでもすれば、その時は演奏会など出来ない。否、出来る気がしない。

全員が揃った舞台以外、立つ気などない。

決意を新たに。

何度、改め新たにして来ただろうか。

これが最後。

この決意を持ち、このまま本番まで突き進む。もう、迷っている暇いとまなどない。その時間が無駄だ。

一週間もしないうちにコンテスト組が帰ってくる。

その時、新たなスタートを切る。

タイムリミットは近づいてきている。もう、手の届くところにまで。

緩んだ空気は俺が締める。

冷えた闘志には俺が火を点け燃やそう。

やるべきことはあとわずか。

“今はただ、盲目的に進むのみ”

全員、一緒に舞台に立つんだ。



45) Zur Phase des Finales

「いよいよ決勝。」

予選通過の宣告がきたのが、つい昨日のことの様。  
時間が経つのが早く感じられる。  
そして、こんなに早いとは思ってもいなかった。

「気持ち、緩んだりしてねえよな。」

「それはこっちの台詞だよ。」

確認の為の言葉。

一応口にしてみただけ。 本当は、そんなことをせずとも解り合っ  
ている。

何せ、2人は共に決勝の舞台に立つ同士。  
このくらい、以心伝心。

「行つてきます。」

誰もいない部屋に向かって言う。  
こんな事、もう慣れた。  
時間を確認する為に携帯を開いた。  
その時、  
偶然だった。

電話がかかってきた。急いでいたけれど、迷わずに出た。時差があると云うのに、それも考慮してかけてきてくれたのだろう。向こうはまだ、深夜のはずだ。

「もしもし・・・」

『頑張ってこい。』

それだけ、たった、それだけの言葉。

「行ってきます」

『いつてらっしゃい。』

それだけで十分だった。

涙が溢れて来た。

馬鹿、こんな顔じゃ、舞台上に立てないじゃない。

“それぞれの思いを音にのせて”

いざ、決勝の舞台へ

46) Ein pers?nlicher Kampf

客席には薄暗い照明。

それとは対照的に、照らされる舞台上。

汗ばむくらいライトに照らされ、いざ、決勝の音楽を。  
心に響かせる。 叫び、祈り、そして……。

『エントリーナンバー……』

アナウンスが流れる。

刻々と近づいてくる本番。 高まる緊張と高揚感。

上がり過ぎた気持ちは、自らを闇へと突き落とす。

だから、無理にでも抑え込む。

落ち付け、自分。 そんな程度ではない。

遂に前奏者が終わった。

いよいよだ。

『エントリーナンバー……』

この舞台の上に味方などいない。

『伊勢七緒。』

信じるは己のみ。

「いつてきます。」

誰にでも云う訳でもなく呟かれたかのような言葉。

しかし、彼女にとって今のは明確な意志を持ってある人へと向けた

言葉。

踏みだされる足、それは己の未来への道を見つけるため。

本番の舞台はもう、待つてはくれない。

必ず掴み取ってみせる、この先にある栄光を

客席には薄暗い照明。

それとは対照的に、照らされる舞台上。

汗ばむくらいライトに照らされ、いざ、決勝の音楽を。  
心に響かせる。 叫び、祈り、そして……。

『エントリーナンバー、……』

アナウンスが流れる。

刻々と近づいてくる本番。高まる緊張と高揚感。上がり過ぎた気持ちは、自らを闇へと突き落とす。

だから、無理にでも抑え込む。

遂に前の演奏者が終わった。

やっと、だ。

曲のとらえ方は以前と変わっていないのに、音が変わった。知らない人にそう言われた。

音楽に対する姿勢を変えたのだ、当然だと思う。

しかし、同時にそれが不安定にさせる。

慣れない事をするからだ、たとえそれが原因だとしても、これでも一応プロの端くれといっても過言ではない音大生がそれを言い訳にはできない。させてくれない。

『エントリー・・・』

遠くで呼ばれているのが聴こえる。

いざ、決戦の舞台へ

一歩、踏み出す。

舞台上に鎮座する漆黒のピアノが待っている、僕に演奏されるのを。

47) Der Kampf der Gruppe

客席には薄暗い照明。

それとは対照的に、照らされる舞台上。

汗ばむくらいライトに照らされ、いざ、決勝の音楽を。心に響かせる。叫び、祈り、そして……。

『エントリーナンバー……』

アナウンスが流れる。

刻々と近づいてくる本番。高まる緊張と高揚感。

上がり過ぎた気持ちは、自らを闇へと突き落とす。

だから、無理にでも抑え込む。

落ち付け、俺。そんな程度ではない。

遂に前奏者が終わった。

次は俺たち。

「いよいよだ。」

「ああ。」

舞台袖でガツチリと握手を交わす。

『エントリーナンバー……』

緊張しているからか、すぐに順番が来たように感じる。

『……石田雨竜、黒崎一護。』

しかし、その緊張すらもはや楽しい。そう感じられるのは、隣に

心強い味方がいるからか。

「行こう、一緒に」

「ああ、一緒に掴もうぜ。」

この手で、あの栄光を  
奪い去るかの如く、鮮やかに



明かされる順位。

不安を隠しきれない七緒は、自信の体を庇うかのように抱く。  
先ほど演奏を終えただけ。

それは皆同じ。

でも、皆には応援する家族や友達、そして師匠が駆けつけている。  
自分には誰も居ないということがこんなにも不安にさせているのか、  
あるいは……。

自信がないからなのか。

明かされる順位。

柄にもなく緊張している。

コンテストに出ている回数が少ないからではない。  
いつもと違う考え方で出場していたのが初めてなのだ。

立ち位置が変わると気持ち悪い、それと似た様な感覚。このために練習した曲はどれも難解。しかし、どれも充実したものとなった。

マゼツパから手をつけ、最終的には鬼火にも手を出した。決勝が終わって、第一に持った感想が「楽しかった」。だからもう十分だろう。 疲れた。

弓親は、ゆっくりと薄暗いホールの天井を見上げた。

明かされる順位。

緊張した面持ちで2人は結果を待つ。

舞台の上で、やりきった。 そのひとときは本当に楽しかった。ただそれだけが、今の彼らを包んでいて。

「正直、順位とかどうでもよくなってきた。」

「何を言っているんだ、黒崎。」

そんな事を言う一護に雨竜は湯を入れる。

「世の中、プロセスを見てくれる人なんてほとんど居ないんだ。」

結果を残すしか僕たちに残された手段はないんだよ。」

「……。」  
雨竜が言っていることが全て間違っているとは一護には思えない。  
しかし……

「でもさ、人に聴かせるために音楽をやってんだ。」

一護の、まっすぐと音楽に向き合うその姿勢。雨竜には眩しいばかり。

「……。君には敵わないよ。」

その考えに、今回、何度助けられたか。  
両手だけでは到底足りない。

『結果を発表いたします。』

いよいよ。場の空気が一変する。  
貼りつめた様な、冷えた様な。凍えるとは違うが、兎に角、冷たい空気。

『……優勝は……』

斬り付けられるような空気。

一護にとって、この瞬間は、とてつもなく耐えがたい。  
雨竜にとって、この瞬間は、とてつもなく長く感じる。

優勝、出来なかった。

悔しい。横では、家族や先生と優勝者が喜びを分かち合っている。しかし、会場の空気は未だ融解しない。発表が全て終わっていないのだ。

『最優秀演奏者は、エントリーナンバー・・・』

これが最後の発表。

‘最優秀演奏者’、要は、‘審査員特別賞’と同義。

この、‘ホルン’のコンテストにおいては、優勝よりも栄誉ある。

しかし、社会的には優勝の方が印象は良いのだが。

『伊勢七緒！』

欲しいものとは違ったが

願いに願った栄光が、この手に

こんなにも学校の門が大きいと思った事は今まで無かった。それはなぜか。

考えられることといえば、タイトルを取って帰ってきた事。それ以外に何かあるのだろうか。

今、そのタイトルに潰されそうになっている。

初めて手にした、その重みによって。

でも、そのようなこと周囲に知らせるわけにはいかないし、知らせるようなへまもしない。

プライドが許さないから。

弓親は指定された場へと足を進める。

優勝という、初めての結果を手にして。それに伴う期待に応える

ために。

本当の意味で帰ってきた。

何度も学院内に立ち入ってはいたが、コンテストが終わってからは初。

以前来た時は、背に背負う楽器が思いと感じていた。

しかし、今は違う。

ほんの少しだけ、少しだけだが、軽く感じる。

「・・・ただいま」

「おかえり」

小さく呟いた言葉に返事などない、そう思っていたのに。

聞こえて来たその声は

七緒はゆっくりと振り返る。そして、目を見張った。

其処に居たのは・・・

門をくぐり、思いっきりのびをする。

「やっと終わったーっ！」

重しが取れ、落ち着いた気持ちで門をくぐるのは何時振りだろっ。

「とりあえず、おめでとっ、黒崎。」

「いや、石田の御蔭だっ。おめでろっ、石田。」

学院内から晴れた空を見上げる。

求めた結果を得た2人が見る青空が綺麗だった。

「ここでゆっくりしている暇は無いね。」

自然と止めてしまっていた足を再び動かす。

まるで、止まっていた歯車を動かし始めるかのように。

「さあ、後は演奏会へ向けて突っ走るだけだ。」

「ああ、着いて行くぜ。コンマスっ！」

皆が待つであろう練習室へと走った。

コンテストでの結果を持ち、音楽の楽しさと自信を糧に。

いきなり開けられた扉。

静まり返る。

「石田と一護の奴、遂にやりやがった・・・！」

無駄に響く恋次の声。

「そんなこと、皆知ってるよ。」

「そうそう、大体、遂に成し遂げたのは彼らだけじゃないからね、阿散井くん。」

冷静な幼馴染2人からの訂正、というなの厳しい修正。

「でもさ、2人でって所がスツゲー良いじゃねえか。」

目をキラキラさせて、恋次は自席へとつく。

この場の話は、コンテストの結果で持ち切り。

いきなり開けられた扉。

静まり返る。

「おうっ、皆、久しぶりだなっ」



無駄に響く一護の声。  
皆、扉から入ってきた人物に釘付け。  
噂をすれば影。 そんなかんじだ。

「・・・なんだよ。」

「おい、黒崎。 入り口で立ち止まるな。」

一護が出入り口を塞いでいたところを退かせ、雨竜が中へと入ってきた。

依然として、皆は釘付け。

「・・・おめでとう。」

誰かが言う。

それが波源となって、皆が口々に「おめでとう」を口にする。

「なんか照れ臭いな」

「ありがとう」

嬉しそうな2人。 そこに、新たな人物の登場。

「ちよつと、2人でこんな所に立ち止まってたら入れないじゃないか。」

不機嫌そうな声。

2人が振り返る。 そこに居たのは、仁王立ちのピアニスト。

「綾瀬川!？」

「何も驚く様な事じゃないだろ?」

驚き声を出す一護に弓親の機嫌は一層悪くなる。

「悪いって」

「邪魔だよ。」

「あ、綾瀬川さん。」

弓親の機嫌に連呼するように一護のテンションが下がる中、雨竜が弓親に話しかける。

「おめでとつございます」

そう言った雨竜が意外だったのか、弓親は一瞬だけ目を大きくした。

「ありがとう、君こそ。」

ふわり、と笑み、弓親はピアノ椅子に座った。

そして何をするでもなく、鍵盤を撫でるその姿は、以前にも増して楽器が愛おしそうだ。

「変わるもんだな」

「何が」

「別に」

雨竜と一護も自席に座る。

「結果を知った瞬間ってどうだった？」

すると、途端に質問攻め。皆、自国開催だった2人のコンテストを聞きに行っただけではいなかったのか。

久しぶりに全員が揃いそうな空気に、皆の気分も高まっていく。窓から入ってくる風が、全員の頬を撫でる。

「・・・揃ったか」

遅れて登場。

「いや、まだだ。」

コンダクターの問いに応えたのは、彼から一番近い位置に居るコンマスだ。

冬獅郎の眉間にしわが寄る。

「誰だ・・・。伊勢と檜佐木か…。」

檜佐木修兵の身に起こったことについて知らないものが半数以上。しかし、それについてはもう語るつもりが無いらしい冬獅郎は、何事も無かったかのように2人を待つ。

「そういえば、伊勢の結果を知ってるか。」

「新聞を見りゃ載ってんじゃねえか。」

ふいに呟かれた冬獅郎の言葉に、一護は食いつく。

「・・・質問を変える。本人から結果を聞いた奴はいるのか？」

皆に向かって投げかけられた質問。

しかし、誰も答えない。

「居ねえのか……。」

「遅れましたっ」

まるで、扉を蹴飛ばすかのように入ってきた。

「早すぎたか？」

「いいえ、これくらい大丈夫です。時差などに負けてはいられません。」

前に冬獅郎たちが彼女と会った時よりも元気そうな様子。

「ならいいんだが……。伊勢、おめでとう。」

「ありがとうございます」

何かあったのだろうか、と冬獅郎が不思議に思っていると七緒の後ろからある影が。

その人物を見て、納得する。

「遅いぞ、檜佐木。」

「すみません。迷ったんすよ。」

恥ずかしそうに言う姿は、言い訳なのか、素なのか、取り戻したのか、繕っているのか。どれが本当だ。

「まあ、いい。2人とも席につけ。」

檜佐木の記憶喪失について知っているのは冬獅郎と七緒だけ。皆には「万全ではない」としか伝えてない。

此処に来たからには、完全復活と受け取っていいのか。

やっと、全員がそろった

久々に埋まった。全員が揃った。

全ての椅子に奏者が座る。

楽器を片手に、譜面を目下に。

そこに冬獅郎が静かに話し始める。

「決勝が終わって、初めて全員が揃ったな……。取り敢えず……」

…コンクール、お疲れ。」

「「「お疲れー。」「」」

「……元気だな。」

声を合わせて返ってきた返事に、冬獅郎は思わず苦笑する。

「私たちは何時でも元気ですよ。」

「そうそう、おまけに皆帰ってきたし余計やわ。」

そう言うのは乱菊と市丸。

それを見て、修兵は冬獅郎を見る。

「檜佐木……もう楽器吹いても良いのか？」

「大丈夫ですよ。それより、俺が居ても良いんですか？」

「問題ねえ。むしろ、居てくれ。」

「はいっ。」

元気に歯切れよく返事をした修兵を見て、冬獅郎は、今度は笑う。

檜佐木修兵、完全復活だ。

その過程に何があったのかは想像できないけれども。

「本当に元気だな。」

「冬獅郎が元気ないだけじゃねえの？」

「黙れ、黒崎。」

「うわ、俺だけ扱い酷くね？」

そう言う一護を無視し、冬獅郎は話を始める。

「……これには目を通したか？」

その手には一冊のスコアが。  
頷く楽員に、話を進める。

「空白の譜面は、自分の思い思いにやってくれ。毎回同じ必要はねえ。伴奏に合わせさえくれれば良い。」

慣れないことに戸惑っているのか、それぞれの反応が薄い。

以前にも一度話したようにも思っていた冬獅郎。なので、この皆の反応に少々戸惑う。

だから、冬獅郎は皆の方を向き口を開く。

「これに目を通して何を感じた？」

静かに問う。

「俺は、完全に演奏者が好き勝手出来る曲があれば、って常々思ってた。」

スコアを両手に持ち、視線を落とすと言う。

「演奏する以上、作曲者の意図を作曲者の表現したいことを、指

揮者を筆頭に奏者は読み取る義務があるからな……。」

その声はどこか悲痛そう。

「……指揮者である俺がこんなことを言っちゃあいけねえと思うが……作曲者の意図も無視して、聞き手のところさえも無関心に演奏できた時、それが一番自分らしい演奏なんじゃねえのか。」

前を、皆を見る。

「何の為に楽器を手にする？ 何を考えて音楽を奏でる？」

ひとりひとりと目を合われる。

「俺たちは曲を通して思いを届けるんだ。 そのために曲を選んだるに過ぎねえ。 ……俺たちは作曲者の為だけのオーディオなんかじゃねえ。」

常々もどかしく思っていたことが、言葉となり、勢い良く吹き出し溢れる。

「本来、演奏者つてのは、自分の思いを音にするだけ……。 そのおまけなんだ、他人から好評価を貰うつてのは。」

言っていることは支離死滅かもしれない。  
でも、これは紛れもなく彼の本心。  
溜め込んでいた音楽に対する情熱。

「“Color”はこんな考えの俺が書いた曲だ。 思う存分、好き勝手に演奏してくれ。 誤答なんか無い。 有るとするなら、



それは、てめえ等が真剣に曲に向き合わなかったって事だ。」

この曲を、学院にとって伝統のある大切な演奏会で演奏することが、冬獅郎の私利私欲の自己満足に終わるのか。それとも、革命を起こすのか。

「正解は、ひとりひとりの感性に。」

それは、皆の出した答え次第。

音楽に向かって喧嘩を売るのはないけれど  
挑戦しよう  
いざ、行かん

52) Das erste Ensemble

前の集合から数日が立っていた。  
各自、譜面について再検討したり、練習したり……。

いきなり連絡が届いたのにも拘らず集結する俺たちって……。

「どれだけこの日を楽しみにしてたんだよ、か？」

「うわあああ！ いきなり喋んな、ルキア！ あと、人の心の中  
を読むんじゃねえ……！」

「仕方あるまい。」

ルキアは得意げに、手を腰に当てて言う。

「口に出ていたのだからな。」

「なっ……！」

恋次は完熟トマトのように赤くなる。

「どっからが顔で、どっからが髪だ？ 赤すぎて見分けがつかん。」

「んなわけあるかーっ！」

思わず立ち上がり、ルキアを見下ろす。

「ちゃんと見ろ」

「落ち着け、恋次。」

「そうだ阿散井、黙れ。」

どこからともなく現れた冬獅郎。ルキアの横に立つ。

「その言い方は酷くないっすか!？」

「意見するな。座れ。」

キツイ口調と機嫌の悪そうな声で言われ、恋次は黙る。そして椅子にどかっと座った。

「やっと全員揃って、演奏会に集中できるんだ。」

いつもの冬獅郎の声に戻った。

しかし、それは一瞬だけ。顔は、怒っているようで泣いているような、無表情。

「心してかかれ。気が抜けてる奴は、明日からその席はないと思え。」

場の空気が凍る。皆が見せる表情も凍り付く。

そんな中、コンマスだけはコンダクターと同様の表情。それが発言内容に信憑性を持たせる。

「遅れてすみませーん」

そこへ入ってきた。間延びした声。

皆の視線が一点集中。

「檜佐木か。思ったより早かったな。」

声をかけたのは冬獅郎。

遅れることと理由を知っていたからか、その声は先ほどよりも優し

げ。

「そうっすね。いつも話の長いあの人の割には……。」

そう言っつて、修兵は席に着く。

それだけだったのに、場の空気が融解した。

「じゃあ、第一楽章。」

いつも見る表情に、やっと戻った。

冬獅郎はコントラバスを見、市丸を見る。

共に息を吸い、振り始めた。

### Color 第一楽章

最後の音が消える。この音が織姫へと繋がる橋。

冬獅郎は何も言わず、織姫を見た。織姫はその意を解し、口を開く。

「……コントラバスから静かにはじまるなんて、まるでチャイコフスキーの“悲愴”みたいだね。」

それが、第一楽章に言い渡された一番目の感想だった。

合奏をいったん中止し、各々、練習室に集う一部のメンバー。  
それは弦民、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス。

「ハーモニーが汚い。」

この声は、冬獅郎のものではない。コンサートマスターの雨竜だ。  
声にこそ出していないが、イライラしている様がありありと顔に  
出てしまっている。

「これは聞くに堪えない。ソロを潰すつもりかい？」

穏やか過ぎるその口調が、この場の空気を冷たくする。  
心なしか、責められている様な気になってしまう。

「自分だと思ったら、それは正解だよ。」

口元が引きつる者、眉が下がる者、俯いてしまう者。

無意識に起こす行動が、雨竜の言葉に当てはまる人物たち。 つま  
り、

「君たち、僕らがコンテストに出ていた間に練習する時間は沢山  
あっただろ？」

「まあ、まあ・・・そー怒らんと。」

「そうですね。」

市丸がそう言ったことで、空気は少し暖かくなった。

彼も雨竜たちと同じく、コンテストの決勝まで駒を進めていた人物。  
結果は勿論・・・言うまでも無く。

「じゃ、もう一度。止めた所まで。」

こっちは金管。

「ハーモニーが汚い。」

どこかでも聞いたセリフ。

「ハーモニー楽器が、このような有様でどうするのです?。」

七緒がホルンとトロンボーンを睨みつける。

ハーモニーを作ることが得意なことの一つです、と言っても良いホルンとトロンボーンはこの言葉を受けて意気消沈。

しかし、そのようなことで凹んでは前へは進めないし、なんと  
いったって音大生だ。その辺の趣味でやっている者よりはプロなのだから。譜面を一瞬で読み取り音として具現化しなければなら  
ない。

「もう一度」

迫りくる焦燥

本番まで、時間は何時までも続かない

時間は刻々と進んでいく

足を止めようと、後ろを振り返ろうとも

54) Fahrli?ssig

今はただ、進み進み、ただ進む

振り返りすぎではいけない

でも、振り返る事を忘れた者は、落ちる、墮ちる、墜ちる  
前を見て、時には振り返り、

共に歩む横に歩く同士に先に行かれぬよう、置いて行かぬよう  
次々に襲い来る障害を乗り越え、壁を回避する

自らを信じ、同士を信じる

何の為の仲間だ

何の為の仲間か

答えは、すぐには見つからない

見つかったような気になっているだけの奴らは、ただの餓鬼  
ただの餓鬼にだけにはなるな

止まることだけはするな

速度を落としても、進む足を止めてはいけない

次の一歩が重すぎるから



遂に、この日が来る。

待ち望んだ本番はもう明日。　そう言っても、24時間はとっくに切ってしまったている。

開演時間まで、残り14時間。

今からもう緊張してしまっているのか。　目が妙に冴えてしまつて、なかなか眠れそうにない。

薄暗い部屋の中、手探りで携帯を探す。　そして、おもむろに電話帳を開けた。

ここまでは迷うことなく動いていた手だった。　しかし、ここに来て固まる。

「こんな時間に電話なんて、迷惑だよね…。」

小さく光る画面を、ただただ見つめる。

今すぐ聞きたい声がある。　でも、相手に嫌われるなんて耐えられない。

そして、

パタン

悩んだ挙げ句、閉じてしまった。

携帯を手に握り締めたまま、再び寝ることに集中する。　そう思えば思うほど、益々眠れなくなるというもの。

「やっぱりダメだ。」

布団から飛び起き、その辺にあったジャージに着替え、携帯片手に

家を飛び出した。

もう春が近いというのに、外はまだ肌寒かった。  
行くあてもなく、夜を彷徨う。

だんだん心細くなっていて、帰ろうかと考えていた。  
その時、

ピルルル、ピルルル…

いきなり鳴りだした着信音。

誰からなのかも確認せず、受話器のボタンを押す。

「もしもし、」

『井上、こんな時間に何してんだ？』

「……え、」

思いもしなかった相手。

「黒崎くん?!」

意味もなく、無性に聞きたかった声の持ち主。

織姫は右耳にあてた携帯電話を継るように両手で持つ。

「えーつとねえ、うーんとねえ。」

『俺の居場所、わかる？』

「へ?」

予期しなかったことが次々と織姫に降ってくる。

『ヒント、井上のジャージ姿も可愛い。』

かああ…と頬が熱を帯びる。

「そ、そんなあ。照れちゃうよ。」

へへへと笑い、咄嗟の照れ隠し。

『そういつとこ、高校の時から少しも変わらねえなあ……。』

懐かしむような声。

「それは黒崎くんだったって！ いっつつも皆の中心に居て、皆を護って…。」

『ありがとう、井上。だからだろうな……。』

ツーツーツー……

いきなり切られた電話。

「黒崎くん?!」

一体、何事か。

心配になり、思わず悲鳴にも似た声が。

「緊張したりすると、井上の声が聞きたくなるのは。」

スピーカーごしではない、生の声。

ゆっくりと織姫が振り返ったそこに居たのは、黒崎一護。

「よお、夜道に女の一人歩きは危ねえぞ。」  
「黒崎くん?!」

今夜三度目になる織姫の驚く声。  
織姫は、思わず駆け寄る。

「そんなに驚くことねえだろ…。」  
「だって…。」

物理的な二人の距離は三步。  
後、ほんの少しで良い。一步近寄れば、その手は相手に届く。  
でも、織姫には、一護との間に見えない壁があるような気がしてならない。

「用事は済んだのか? なんなら送るけど…。」  
「え、良いの?」

その壁を一護はいとも簡単に破って、織姫の横に立つ。

「帰るぞ。冷えるだろ。」  
「うん!」

そのことが嬉しくて。  
一護が歩きます。織姫はその半歩後ろを行く。  
聞こえるのは歩く足音、夜の合鳴。

「……へ?」

急に触れた、一護の手。

横に立つ彼を見上げる。

「風邪でもなってみろ、明日が本番だぞ……。」

「そっくだよね、明日が本番だからね！」

まるで、言い訳をするかのように、自分に言い聞かせるように。

互いの顔に少し紅がさす。

織姫はその自分より一回り大きい手を軽く握り返した。

繋がれた手を放さないように、今の瞬間を忘れないように。

凡人も天才も同じ所で悩む

しかし、凡人と天才の違いは

‘天才は決して行き詰まったりはしない’

そして、‘いとも簡単に軽々と乗り越えていく’

あるいは、‘乗り越えていくだけの運と器量を持ち合わせている’

客席が次第に埋まっっていく。

それを2つの銀色が舞台袖から覗き見ている。

「うわ、去年より多いわ」

「毎年こんなもんじゃねーのか？」

冬獅郎の問いに、市丸は右手に持った弓を軽く振って答える。

「この時間で立つてる客がいるのは尋常やないで」

「そうか？」

「今年の演奏についての情報は、微かに聞こえた練習の音だけ。

そりゃ、誰だって気になるやろ。」

うんうん、と頷いて市丸は自分の楽器を取りに戻る。

入れ違つようにして別の人間が冬獅郎に近づいてきた。

「冬獅郎、俺緊張してやべえ。もう、体ガチガチ」

「その調子で俺の視界に入るな、黒崎。あと、緊張するな。周りに伝染する」

今度は銀と橙が客席を覗く。

「それは無茶だ…って去年より多くね!？」

「ついさつき、市丸も同じ事を言ってたぞ。」

「見なきゃ良かった。余計に緊張してきた…」

「……今日の為に、黒崎が今までしてきた事ってのはその程度なのか？」

「ちがうつ…!」

一護は客席から目を離し、冬獅郎の整った横顔を見る。

「なら、自信をもて。……もう時間だ。胸を張って、行って

こい」

冬獅郎は一護の背を軽く押す。

「俺も後で行く」

その手は震えていた。

一護はそれに気が付く。

緊張の所為で険しかった顔が、いつもの人懐っこい一護に。

「おう」

先頭を切って出ていった黒崎に引き続き、打楽器とコントラバスの奏者は何も持たず、それ以外の奏者は各々の楽器を持って舞台上がって行く。

本番まであと2、3分。  
冬獅郎の手の震えはまだ止まらない。

「石田」

雨竜は冬獅郎に呼ばれ、舞台へと向けていた足を止める。  
そこには、不安げな表情のコンダクターがコンサートマスターを見上げていた。

「さつき黒崎に偉そうな事を言ったが……」

「僕たちは何があっても君について行く。」

雨竜は、彼の不安を取り除くように、彼の目を見てゆっくりと言う。  
彼の言わんとしていることが解っているかのように。

「僕は君と一緒に演奏出来る事が素直に嬉しい。……もう此処まで来たんだ。だから、楽しもうじゃないか。」

そう言うと、雨竜は深呼吸をして背筋を伸ばす。  
その視線は既に舞台上。黒とも紺ともつかないその瞳は、自信だけを宿して前を見る。

「不安なのは皆同じ。それだったら、それを共有すればいい。  
……………それが、皆で演奏するってことなんじゃないかな。」

そして、雨竜は舞台へと足を踏み入れていった。  
ホールから聞こえる小さな拍手の中、舞台袖には冬獅郎だけ。

A



チューニング。

皆がピッチを合わせ、じきに音が止む。

暗転。

客席が、舞台上がただ暗いだけではない闇に包まれる。

先程の雨竜の言葉で、両手の震えはとまった。

冬獅郎は襟を正し、明かりの下へ堂々と踏み出す。

舞台にいる1人ひとりが

見えない期待を背負い

見えないプレッシャーと戦う

君は独りじゃないんだ

だから、皆で乗り越えよう

恐がることなんてない

舞台上にいる皆は、そのために集められた仲間なんだ

この演奏会の記念すべき一曲目はハッピーエンドで幕を下ろすオペラ。

騎士と姫、白魔法使いと黒魔法使い。その他にも登場する多彩な登場人物と、グリーンカによるロシア音楽が光る。

タクトが振られたその瞬間、彼らの音楽の時間が始まる。

冬獅郎はくすりとませず、軽くお辞儀をしてタクトを構える。楽団員に緊張が走る。

#### 歌劇『ルスランとリュドミラ』より序曲

tuttiのフォルティッシモ。

その第一音だけで、楽団の技量が嫌でもわかってしまう。

響いた音は、かたかった

コンクールなら、ここでお終い。しかし、今は演奏会。舞台上に緊張が走る。

しかし、冬獅郎は表情を一切変えずに振り続ける。

終わり良ければすべて良し。ここから挽回するしかない。

冬獅郎の目に、冷静の色と闘志の色が同居する。その目は青とも緑とも判別がつかない。

スピード感溢れるこの曲で、しかもかなり速いテンポで演奏している今、一瞬の揺らぎは命取りになる。

#### 怒涛の八分音符の連続

ズレなどは許さない

その後、始まる飛び跳ねるような主旋律

弦楽器がずっと動き回る

止まることを知らない

スピードを落とさず、走りもせず

安定して一定のテンポを刻む低音楽器が聞き手をグリンカの世界へと引き込む

曲調に沿うように、だんだんと柔らかく、悪い緊張が解け、良い緊張へと変わる。

中音による豊かな音色のメロディ

そこに可愛い飾りを付ける高音たち

中音から同じ旋律が高音へと手渡される。

裏にはカウンターメロディが存在感を示す。

豊かに

深く高く広く

甲高い音だが、どこか心地よい

動の次は静。

囁くように

はつきりと

その後は曲の終わりに向けて盛り上がる。

低と高がクロスする

まるで階段を行ったり来たり

曲はクライマックスへと突入する。

t u t t i

全楽器が鳴り響く

全体の動きが止まる中、余韻だけがホールで動く。

一瞬で終わった、一瞬で通り過ぎた、3・58。

まだ演奏会は始まったばかり。

さあ、次の曲へと移ろう。

o v e r t u r e

オペラが始まりを告げられるのと同時に

自分たち若者が紡ぎだす新たな音楽の歴史を

共に告げよう、創りだそう

これが自分たちの o v e r t u r e

たった今、始まったばかりだから

白い紙に、七色の筆が走る

63) Pavane pour une infante d'Espagne

自らの演奏に関して、滅多に感情を面には出さない七緒。緊張さ  
えも、顔には決して出さない七緒。

珍しいことに今、そんな彼女の顔が強張っている。

それも仕方がないのか。次の曲は彼女が主演。

1回、大きく息を吸い込む。そして、同じスピードですべて吐  
ききる。

大丈夫、と小さく自分に言い聞かせて、ホルニストは指揮台に立つ  
小さな指揮者を見る。

それが合図だった。

亡き王女のためのパヴァーヌ

大きく深く、空気を肺に取り込む。そして、取り込んだ全部を音  
に変換する。

ゆつたりと、かつ、ゆるやかに

それでいて、堂々とたおやかに

楽器が奏者に応え、うたう

それはまるで…

皆は一人の為に、基盤を作り支える。

メロディのどこかに哀愁を

メロディのどこかに愛執を

一人は皆の為に、基盤の上を飛び跳ねる。

今は彼女の独壇場。流れは彼女が握っている。

まるで、彼女のための舞台のよう。

愛しの王女が目に見えるよう

亡き王女がよみがえるよう

弦のつくる小さな波

波に身を任せる管楽器

その中央のホルン

その後、バトンは木管楽器へと手渡される。

一曲目とは対照的。緊張からくるかたい音などではなく、落ち着いた優しい音たち。

時に大きく、時に小さい

弦楽器の波

管楽器の波

中盤で生じるちらほらと聞こえる小さなミス。そこから綻びが生じる。

しかし、コンダクターがコンマスがそれを許さない。

一瞬で修正し、再び姿を現す冒頭と同じ主旋律、ラストのホルンへと何事もなかったかのようにつなぐ。

それはまるで…

見返りを求めない、まるで母が子に与える愛

そんな愛の調べ

余韻が消え、次に聞こえるのは観客からの拍手。

控えめに礼をした冬獅郎は、まだなり止まぬ拍手に七緒を立たせる。尚続く拍手。しかし、これが山ではない。

恥ずかしそうに礼をした七緒が再び座つたのを確認して、コンダク

ターは舞台袖へと姿を消した。

舞台の明かりが消え、ホール全体が明るくなった。

決して間違えるな

失敗することが恥なのではない

失敗を次に生かせないことが恥なのだと云うことを

64) Bruch

「恋次、すっげえ人だぞっ！」

舞台から飛び込むように戻って来るなりこの一言。それはそれは興奮した様子で、頬が赤い。紺の背広がそれを余計に引き立たせている。

「うつるせえな！ こっちは集中してんだよ。少しは静かにしろ。」

「なに……」

そこまで言って、一護は周りを見渡す。黒の背広を着た恋次の背後には、微笑ましそうに見守る視線から、邪魔者を見るような視線まで。今、休憩室には色々な感情が渦巻いている。

「すみませんでしたあ……………」

一護の声がフェードアウトしていく。それはまるで、やりかけて止めたディミネンド。それがよっぽど可笑しかったのか、

「そんなディミネンド、下手な吹奏楽部でもないよ。」

等と言って笑うのは、紺の背広がよく似合うコンサートマスター。

「うつせーなあ……………」



凶星だったのか、一護は言い返せない。

「そこはもつと、こう……音大生らしく、ね？」

「フォローにも、慰めにもなってるねえ！」

そう言い返されるとは本気で思っていなかったらしく、雨竜はムツとする。

「僕は事実を述べているだけだ。」

「でも、もう少し良い言い方があつたらー！」

「……おい、一護。」

そこに口を挟んだのは、濃紺のパンツに純白のシャツを着たルキア。

「コンテストの時はあれだけ石田に頼っておいて………どういう風の吹き回しだ？」

当時、一護が雨竜に依存していた光景を間近に見ただけに、ルキアの発言に、どつと笑いが巻き起こった。

それを遠巻きに見つめる2人。紺の背広と黒の背広。

「やっと張り詰めた空気が抜けて………楽しそうじゃないか、今の彼ら。」

「……綾瀬川は楽しくねえのか？」

「まだ舞台上に立ってないからね。これからだよ。」

そう言って、部屋を出る。

「もつとも、音楽を楽しい、とするならばの話だけだ。」

今回、演奏会を行う上で体験してきたことを持つてしても、まだそのようなことを言うのか。  
捻くれた考えというものは、そう簡単に改められないらしい。

「ぜってーに言わせてやる。」

小さく呟き、一人誓う。

楽しかった、と

第2幕、まもなく開演。

前半に出番がなかった者が多かったが、後半は全員出場。  
開演前より、舞台袖も客席も、人数が増え、賑やかに。

「思ったよりも多いな。」

「あれだけ騒いでおいて………もつとかと思っていたよ。」

聞こえてくる感想は様々。

そして、その表情はもつと多岐に。

一向に落ち着かない舞台袖。 が、静まった。

皆の視線は一人に。

「こうやって、何もしてねえのに注目が集まってもなあ。 ……こ

れを普段の練習からやってくれ。」

少し笑って言うものだから、皆にも笑みが。

「遂にこの時が来た。」

小さく低く言われた言葉を、一言も逃すまいと、皆は注意して聞く。

「これが、今日の舞台。 そして今の俺たちにとって、最後の舞  
台だ。 心して取り組み。 そして、全力で疾走しろっ！」

皆は楽器を手に舞台へと、我らが小さく大きいコンダクターの手を  
1人ずつが握手してから、上がる。

「君は、君の好きなようにやれば良い。僕たちは、僕たちの好きなようにする。」

「ありがとう。」

冬獅郎がそう返したのを聞いたのか、雨竜はさっさと舞台へと歩を進めた。

舞台袖に残ったのは、次の主演たち。

「日番谷。まさか、私たちに握手なしに舞台へと上がる気ではないだろうな？」

「当たり前だ。」

そう言いながら、冬獅郎は碎蜂の手を強く握った。碎蜂はそれを強く握り返し、手を離す。

それをサキソフオンの他の三人にも同様に。そして、

「井上は今晚の華だからな。盛り上げてくれ。」

「そんな事を言われちゃうと緊張するなあ。」

へへへつと織姫は笑い、自分より小さい手を軽く握った。

「市丸」

「えらい改まってどないしたん？緊張してんの？」

「うるせえ、違う。」

軽く拳をつける。

最後は、何時にも増して、感情が読み取れない、弓親。

「……まかせて、拍手することすら忘れるくらいの演奏をしてやる。」

冬獅郎に何か言わす暇を与えず、弓親は冬獅郎の背を軽く押す。

「お待ちかねだよ。」

冬獅郎は舞台へと歩を進める。口元につつすらと笑みを浮かべて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2413q/>

---

Ein dolce ~ 真央音楽院、定期演奏会 ~

2011年12月24日12時48分発行